

Post Script

脚本 遠藤 雄史

【登場人物】

サイドA

藤原文香 (二六歳)	F Mモリオカパーソナリティ
吉岡聡介 (二二歳)	F Mモリオカバイト
日山貴明 (三〇歳)	F Mモリオカ契約社員
中村里佳子 (二六歳)	教員
成島 (三三歳)	葬儀屋
武田咲 (二〇歳)	聡介と同じ演劇サークル
瀨田夏樹 (三六歳)	F Mモリオカディレクター
ワタセ	

サイドB

瀨田千鶴 (二〇歳)	磐手大学二年生
瀨田淳子 (四〇歳)	千鶴の母
瀨田民子 (三七歳)	淳子の妹
山下孝太 (二四歳)	民子の恋人
成島 (三三歳)	葬儀屋
武田咲 (二〇歳)	磐手大学二年生 千鶴の友達
瀨田夏樹 (三六歳)	淳子の弟
わたせ	

【狭間】

ここは現世と来世の狭間なのか、現と夢の狭間なのか。人は死しても夢を見るのだろうか。

その夢は人として生きた記憶の名残なのか。

二人の人間が立っている。

一人は吉岡聡介、もう一人は瀬田淳子である。

二人の周りから声と拍動を知らせる電子音が聞こえてくる。

二人の周りを幾人もの人間が囲んでいるが、それはおぼろげではっきりと見えない。

文香 聡介！ 聡介！

声（ワタセ） いろはにほへと―

貴明 落ち着いて！

千鶴 お母さん！

声（ワタセ） ちりぬるを

一人はどこからともなく聞こえてくるワタセの声の方向を探す

文香 聡介！

声（ワタセ） わかよたれそ

看護師の声 全力を尽くしますから。

ワタセ（声） つねならむ

文香 聡介！

ワタセ（声） うみのおくやま

貴明 文ちゃん！

ワタセ（声） けふこえて

千鶴 目開けてよ…

ワタセ（声） あさきゆめみし

文香 離して！

千鶴 独りにしないで…

文香 イヤー！

千鶴 独りにしないでよ！

ワタセ（声） 急ひもせず

一人の周りの人影が消える。

聡介・淳子 ここは…？

ワタセ ようこそ。

聡介・淳子 あなたは…？

聡介・淳子の視線の先にはワタセ・わたせが立っている。
聡介・淳子の周りを狭間で吹く風が流れる。

ワタセ・わたせ　ここは現世と来世を繋ぐ狭間。あなたは現世の旅を終え、来世へと進まなくてはなりません。
淳子　—そうですか：

風が淳子を包み込む。

聡介　来世？　どういう—

ワタセ　道半ばで旅を終えた者、充実した旅を過ごした者、現世に残した者、在り様は人それぞれ。あなたの旅がどのようなモノだったか、それは私の知るところではございません。

聡介　ちよつと待て！

風が聡介を包み込む。
淳子が現れる。

わたせ　私の役目は一つ。あなたの目の前にある三つの扉を一つ選ばせること。

淳子　扉？

わたせ　右の扉は七日の間、別の人間として現世にとどまる事が出来ます。

淳子　生まれ変わるんですか？

わたせ　七日の間、別の人間として。しかし、貴方の正体がばれた場合は、瞬時に消滅していただきます。

淳子　消える：

わたせ　貴方が現世に存在した事実さえも。

淳子　私が生きていたことも：

わたせ　なかったことに。

淳子　：

風が淳子を包み込む。
聡介が現れる。

ワタセ　真ん中の扉は—

聡介　何の話だよ？

ワタセ　四十八日の間—

聡介　答えろよ！　お前は誰だ！　ここはどこだよ！

ワタセ　（聡介を見る）

聡介　俺は：俺はどうなったんだよ！

ワタセ　—足もとの小窓を。

聡介 足もと：？（聡介が足もとを見る）――！ 俺：？ 文香：？

文香が浮かび上がる。

文香は泣いている。

文香 聡介：目開けてよ：聡介：ねえ：聡介：聡介！

聡介 文香、俺はここだ！ 文香！ 文香！

文香が風に包まれる。

聡介 俺は：あの時に：（崩れ落ちる）

ワタセ 真ん中の扉は四十八日の間現世の者からは見えざる者としてとどまる事が出来ます。

風が聡介を包み込む。

淳子が現れる。

わたせ そして、四十八日目の朝、一度だけ、あなたと縁ある者の夢に出ることが出来ます。

淳子 娘に：千鶴に会えるの？

わたせ ただ、一日一音あなたの言葉をいただきます。

淳子 一音？

わたせ はい。――左の扉は、すぐにでも来世へと生まれ変わる事が出来ます。

聡介が現れる。

聡介は崩れ落ちたままだ。

ワタセ・わたせ さあ、どの扉を選ばれますか。

淳子と聡介は何かを考えている。

淳子 真ん中の扉を：

聡介 （真ん中の扉を見る）

ワタセ・わたせ ――そうですか。真ん中の扉を：。「色は匂えど 散りぬるを我が世誰ぞ 常ならん 有為の奥山 今日越えて 浅き夢見じ 酔いもせず」貴方が最後に残す一音は何の音でありましょうか？

扉が開く音。

ワタセ・わたせ 一日目が過ぎようとしています。さあ、どの音を私にいただ

けるのですか？

聡介と淳子が光に包まれる。

【現世】—モリオカ市火葬場ロビー—

瀬田淳子の弟である瀬田夏樹が喪服姿でソファアに座っている。

携帯電話で話をしながら手にはタバコの箱を持っている。

夏樹 —そうなんですよ。何も同じ日に火葬じゃなくもて…間が良いとかか…悪い？悪いと言うか…逆にやばりいいのかな。—え？ ああ、番組にはもちろん…文香ちゃんですか？ 無理じゃないですか…はい…了解です。—俺ですか？ 聡介の…から、姉の…で。終わって…向かいます。大丈夫ですよ、日山ちゃん…から—はい、失礼します。

夏樹は携帯を切り、胸ポケットへ。

夏樹はタバコの箱をいじっている。

そこに、奥からセレモニ―鶴亀の成島が現れる。

そして、反対側から聡介とワタセも現れる。

聡介は静かに夏樹を見ている。

成島 瀬田様。

夏樹 |。

成島 瀬田様。

夏樹 (少しびっくりして) ああ、成島さん。

成島 受け付けの方はいかがですか？

夏樹 ああ…うち、あんまり身寄らないので。姉貴が勤めていた所も小さい所で、あれぐらいでしょう。そろそろ片付けようかな。

成島 かしこまりました。—あの—

夏樹 はい。

成島 ここは…

夏樹 え？

成島 (タバコを見る)

夏樹 ああ、はい。ここでは—

日山 (出てくる) 夏樹さん。

夏樹 (タバコをしまいながら) あ？

成島 (一礼する)

夏樹 でしたの？

日山 (本を見せ) これ…聡介君のデスクに。

聡介 それ！

夏樹 ゼクシイ…本気だったんだな…

聡介 ええ…

日山 はい：

夏樹 切ねえな：

日山 これ：入れられないすかね？

夏樹 お棺に？

日山 はい。

聡介 え？

夏樹 え？ ムリだろ。

聡介 ダメですよ。

夏樹 | 今更。| (成島に) ねえ。

聡介 ええ。

成島 難しいかと。

日山 いや、そこを何とか。

成島 そう言われましても：

夏樹 日山ちゃん、無理言うなって。成島さんはうちの担当、聡介の方にも別の担当の人がいるだろ。| ほら、ああ：

成島 蕪澤ですか？

夏樹 そうそう。

日山 いや、親族でもないから頼みづらくて：

夏樹 だからって俺に言うなよ。

成島 では、ご一緒に。

夏樹 いいんですか？

成島 はい。

日山 お願いします。

聡介 ちよっちょ！

日山と成島が行こうとするが、日山だけ立ち止まる。

日山はゼクシイを夏樹に渡す。

夏樹 何だよ？

日山 今の文ちゃんには見せられないっす。

聡介 日山さん：

夏樹 | そうかもな：

日山が吉岡家の控室へ向かう。

成島が夏樹に一礼をして、日山の後に続く。

ワタセ ご結婚なさる予定だったのでね。

聡介 え？

ワタセ | いえ、その雑誌。

聡介 ああ、これ：。文香には内緒で買ったんですけど：。なんか、こういう形

でばれるのは：ばつが悪いですよね：

そこに、中村里佳子が駆け込んでくる。

聡介 里佳子さん：

夏樹は一礼をする。

里佳子は受付が瀬田家となっているのを見て、あたりを見回す。

夏樹 吉岡家の方の？

里佳子 え？ ああ、はい。

夏樹 このたびはご愁傷様でしたー

里佳子 (怪訝そうに) はあ：

夏樹 あ、こちらの家の者なんですけど、実は聡介君とは一緒に仕事を、それで、どちらもー

里佳子 FMモリオカのー

夏樹 ええ。

里佳子 文香：文香は？

夏樹 文ちゃんの？

里佳子 はい。学生時代からの：

夏樹 そうですね：文ちゃんはこの廊下の先の控室に。

里佳子 ーありがとうございます。

聡介 (深々と頭を下げ) ありがとうございます。

里佳子は一礼して吉岡家の控室へ向かう。

聡介 俺：本当に死んだんですね：

ワタセ はい。

夏樹がパラパラとゼクシイを開く。

聡介 (夏樹) なにやってるんですか？

そこに武田咲が駆け込んでくる。

夏樹はあわててゼクシイを閉じる。

咲 すみません！ 千鶴！ 千鶴は！

夏樹 失礼ですけど、千鶴のー

咲 親友です！

夏樹 ああ：親友：ありがとうございます。ここにご芳名を。

咲　ゴホウメイ？
夏樹　…お名前を。
咲　ああ、はい！

聡介はただなんとなく咲と夏樹を見ている。
咲は芳名帳に名前を書きながら

咲　千鶴：今行くからね：千鶴：ああっ！
聡介　（何かを思い出し）ああっ！
夏樹　え？
ワタセ　（聡介を見る）
咲　千鶴の名前書いちゃった：どうしましょう？
聡介　（何かそわそわしている）
夏樹　あ：うん：隣に名前だけ：
咲　すみませんすみません！
夏樹　大丈夫ですから：

咲が夏樹の左手の方にふと目をやる。
夏樹は左にゼクシイを抱えていた。

咲　あ！
夏樹　え？
咲　（夏樹の左手の方を見ている）
夏樹　（ゼクシイを後ろにやり）これは違うんです。話すときやこしいんです
が、違うんでー。
咲　数珠：
夏樹　はい？
咲　数珠忘れてきちゃった：
夏樹　数珠。
咲　どうしよう：千鶴の大事な日なのに：千鶴が：お母さんに電話します！
（バッグを開こうとする）
夏樹　あの、お貸しします、私の。
咲　え？　だってー
夏樹　ー私は大丈夫ですから。

夏樹は咲に数珠を差し出す。
咲はそれをふんだくるように取る。
咲は数珠を胸の前で強く握りしめ

咲　千鶴：千鶴：

咲が泣き崩れる。

呆然と見る夏樹と聡介。

咲が大きく千鶴の名前を呼び始める

夏樹はゼクシイをソファアに置いて、咲に駆け寄る。

聡介はゼクシイに駆け寄る。

聡介はゼクシイをめくろうと必死になっている。

夏樹 大丈夫、大丈夫ですから、一緒に行きましょう。

咲 あびがどうぼさいばす（ありがとうございます）

夏樹と咲は千鶴たちがいる控室へ行く。

聡介はゼクシイをめくれず―

聡介 この雑誌めくることができませんか？

ワタセ できません。

聡介 できませんか？

ワタセ できません。

聡介 ―俺、本当に死んだんですか？

ワタセ 私というところは。

聡介 だって、みんなの声聞こえますよ。

ワタセ あなたの声は届きません。

聡介 （じつとゼクシイを見る）

ワタセ ―貴方のように不意に訪れた死を理解できない人はたくさんいます。

―しかし、驚きました。多くの方は、最初の一言を安易に選ぶのですが、

貴方は違った。現世と来世を繋ぐ狭間の世界を知ってらしたのですか？

聡介 どうして？

ワタセ はい？

聡介 どうして俺なんですか？

ワタセ はじめのうちは受け入れられないものです。

聡介 俺、何かしましたか？ 何かしましたか？ 俺たち結婚するつもりだっ

たんですよ！ この本だって：（本をつかもうとするがつかめない）少しぐ

らい：（本をつかもうとするがつかめない）少しぐらいつかめたっていいで

しょ！

聡介は本を叩き付けようと本を取ったつもりで頭の上に両手をもつてくる。しかし、結局本を持っていないことに気づき、さらに怒気を帯びた様子になる。

聡介はソファアを蹴る。しかし、何も起きない。

聡介は叫びながらソファアを蹴る。しかし、何も起きない。

聡介は乱暴にソファ―に座る。

聡介 なんなんだよ！

淳子とわたせがロビーに入ってくる。

ワタセ 貴方がこの世界の物質に力を働きかけることはできません。

ワタセは淳子とわたせを視認する。

わたせはワタセに軽く会釈する。

ワタセはあまり気にとめない。

ワタセ ―死んだのですから。

聡介 (勢いよく立ちあがり) 座れているじゃないですか！

淳子 (びっくりする)

ワタセ 力を働きかけているわけではありませんから。

聡介 (力なく座りこみ) : 俺、四月から教師になるんです、小学校の : 小さいころからの夢だったんです : 今の倍率知ってますか？五十倍ですよ : 五百人受けてたったの十人しか受からないですよ : 一回で受かるなんてすごいことなんですよ : 文香 : 俺の四つ上で、ラジオ局のパーソナリティやっていて、人気あって、俺なんか釣り合わないのに : 俺がいつて : 俺、初めて給料もらったら、それで指輪買って、文香に結婚しようって : しようって : どうして : どうして : 死ななくちゃならないんですか : どうして :

ワタセ それは私を知るところではありません。

聡介 : (項垂れる)

淳子 あの :

聡介 :

淳子 あの―

聡介 :

淳子 あの！

聡介 ―え？

淳子 なんと云えばいいかわかりませんが :

聡介 (不思議な目で淳子を見る)

淳子 気をしっかりと。

聡介 : 誰ですか？

淳子 私？

聡介 :

淳子 ―瀬田淳子と申します。―あなたと一緒にです。

聡介 : ?

淳子 ええ。(受け付けに書かれている自分の名前を指さす)

聡介 …ご愁傷様です。
淳子 いえ…お隣いいですか？
聡介 どうぞ…。

淳子が聡介の隣に座ろうとするが、ゼクシイに目をとめ

淳子 あの…こ（言葉が出てこない）…あの…
聡介 （淳子を見る）
淳子 （ゼクシイを指さす）
聡介 すみません、動かせないんです。—もう、関係ないですから、どうぞ。
淳子 —そういうわけには。ここで。
聡介 （また項垂れる）

微妙な沈黙。

わたせ いい天気ですね！

微妙な沈黙。

わたせ ……。
淳子 ええ。
わたせ 火葬日和ですね。

微妙な沈黙。

わたせ 火葬と言っても化ける方じゃないですよ！ あ！ もう化けてるか！
ワタセ （わたせを見る）
わたせ なんちゃって！
聡介 （急に立ち上がる）
わたせ ！

聡介 （わたせを睨み、ワタセに）この人なんなんですか？

ワタセ 私と一緒です。

聡介 （睨み、この場から立ち去ろうとする）

わたせ あら…

ワタセ （ワタセを軽く軽蔑の眼差しで見ながら、聡介について行こうとする）

淳子 あの！

聡介 （立ち止まる）

ワタセ （立ち止まる）

淳子 あなたほどの音を？

聡介 （淳子を見る）

淳子 どの音を、その人に。

聡介 あなたに関係ありますか？

淳子 …。

聡介 (行こうとする)

わたせ あの！

聡介 (止まる)

わたせ 淳子さんの不躰な質問に気を悪くしたら、変わりに私が謝りますー

聡介 謝って欲しいのは、あなたです。

わたせ わたし？ なんで？

聡介 (話し合っても埒があかなそうなので、行こうとする)

そこに文香がロビーにやってくる。

文香は視点が定まっていない様子である。

聡介 ! 文香!

文香 (火葬場の入り口の方へふらふらと歩いていく)

聡介 文香! 文香!

里佳子 文香!

日山 文ちゃん!

日山と里佳子がやってくる。

文香 大丈夫だから:

聡介 文:(言いかけるが諦め、文香から目線を離す)

里佳子 わかっている:

日山 文ちゃん:—!

日山がソファーにあるゼクシイを見つける。

気が動転する日山。

文香は気になるものの、ゼクシイが文香の目に入らないかがもつと
気になる。

文香 ありがと:

里佳子 気にしないで。

文香 …うん:

里佳子 寝てないんじゃない?

文香 …うん:

里佳子 (ソファーに)座る?

日山 ! いや!

文香・里佳子 (日山を見る)

日山 ソファーは：

日山 ソファーにより、ゼクシイが文香たちから見えないうようにする。

文香 外の空気吸ってこようかなって：

里佳子 そっか：私も行こうかな：

文香 ……ありがと：

日山 ……俺はここで

文香 ……日山さんもありがと：

日山 ……うん。

里佳子 文。

里佳子は日山に一礼する。

文香と里佳子外へ出て行く。

日山はゼクシイを持ってソファに座る。

日山は夏樹を目で探すがいないことを確認する。

日山 たくつ：

日山は文香が帰って来ないことを確認して、ゼクシイをソファーに置き、瀬田家の控室の方へ行く。

淳子 あの人が？

聡介 ……はい。俺が文香お何遍呼んだって：届かないんです：

淳子 ……分かります。

そこに瀬田民子が入ってくる。

淳子 民子！

装いは火葬場にはとても合わない派手な格好。

民子は受付の前に立ち、サングラスを外す。

民子はあたりを見回す。

民子 すみませくん！ すみませくん！

淳子 来てくれたの…。

民子 孝太君くくん！

山下 (大きいキャリーバッグを持ってロビーに入ってくる) 民子さん、早いよ。

民子 めんご♪ めんご♪ ねえ、どっちだと思う？

山下 うくん、どうだろう。

淳子 こんなに早く来てくーるなんて、ありがとう…

民子 すみませくん！

山下 民子さん、シーッ！ 大きな声はダメだよ。

民子 だって…

山下 でも、一生懸命声を出している民子さんもステキだよ。

民子 も…！

淳子 この人がこの前話してたー

民子 あのバカが受け付けに出ているって言ったのにー

山下 僕が見てくるよ。

民子は吉岡家の控室の方から顔を出した葦澤に気づき

民子 あ！ 係の人みたい！

山下 ホント？

民子 きつとあっちよ。

民子が吉岡家の方控室に向かう。

山下 民子さん、待ってよく。

山下が大きなキャリーバッグをもって民子の後を追う。

淳子 (山下に礼をしながら) 民子をお願いします。

わたせ あのーイカレタ方は？

淳子 妹です。

わたせ 妹さん！？ ひよっとして、はー

ワタセ (咳こむ)

わたせ (ワタセを見る)

ワタセ (首を振る)

わたせ (ワタセに軽く礼)ーなかなかアグレッシブな方で。

淳子 いい子なんですよ。

わたせ 確かに悪気はないようですね。

ワタセ (わたせに抗議の目で近づく)

わたせ な、なんですか？

淳子 (聡介に) あのー

ワタセ (立ち止まる)

聡介 (力なく淳子を見る)

淳子 少し、話ませんか？

聡介 …はい。

ワタセ （元の場所に戻る）

淳子 お座りになつたら？

聡介 ……はい。

聡介がソファ―に座る。

淳子 （ゼクシイを見ながら）さっきの話を盗み聞きするつもりじゃなかったんだけど―聞いてしまったので…

聡介 もう関係ありません。

淳子 事故で？

聡介 ―はい…車道に飛び出した女の子助けようとして―（力なく笑い）ベタですよね。

淳子 そんなことないです。

聡介 なんだあんなことを…

淳子 その子は？

聡介 ―無事でした…今日も来てくれてます…。

淳子 そ（れ）はよかった。

聡介 そうかな…

淳子 ええ。

聡介 ―ありがとうございます…そう言ってくれる人、いなかっただから…少し気が楽になりました―この状態で楽になっても仕方ないけど（力なく笑う）

―瀬田さんは？

淳子 病気で。

聡介 ご家族は？

淳子 母一人娘一人で

聡介 それじゃ…娘さん…

淳子 私はこうなること分かっていたから、できるだけ残したつもりです。そ（れ）に、私の弟と妹が千鶴―娘なんですけどね、千鶴を助けてく（れ）るでしょうから。

聡介 そうですか―。弟さん…瀬田さん…失礼ですけど、弟さん、瀬田夏樹さんという人ですか？

淳子 ええ。どうして？

聡介 俺、夏樹さんと一緒にFMモリオカで。

淳子 そうですか…きつと、弟がご迷惑をかけて―

聡介 いや、それは俺の方が。今回だって…取材収録中の事故だったから…

淳子 気になさらないで―って私が言うのも変ですね。

聡介 ―ありがとうございます。

淳子 そ（れ）にしても、こんなところで会うのも変なご縁で。

聡介 （軽く笑い）はい。―あの、言葉が―

淳子 この方にお渡しした音が―（わたせを見る）

わたせ 「ろ」と「れ」をいただきました。

聡介 そうですか：本当に出なくなるんですね。

淳子 あなたは？

聡介 俺は―（ワタセを見る）

ワタセ 「ゐ」と「ゑ」と「を」をいただきました。

淳子 え？ でも―

ワタセ やゐゆゑよの「ゐ」と「ゑ」とわをんの「を」です。

淳子 （わたせに）そんなことができるんですか？

わたせ 四十八音ですから。

淳子 （感嘆の声）はああああ、なるほど！ そ（れ）じゃ、わたしも今日は「ゐ」で。

わたせ わかりました。

聡介 でも、ここで音を持っていたって―文香たちには届かないんですけどね。

淳子 そちらの方とお話しするでしょ？

聡介 （ワタセを見る）

ワタセ （聡介を見る）

聡介 （視線を戻し）話なんて：ほとんどしなないです。

淳子 少しは気が紛れるかもし（れ）ませんよ。

聡介 そう：かもしれませぬね。

淳子 とこ（ろ）で―やっぱり音が無いと不便ね―

ワタセ それが、「死」ということです。

聡介と淳子はワタセを見る。

そして、それぞれワタセから視線を逸らす。

ワタセ 勘違いなさらないでください。今、あなた方が話していることがあり

えないことなのです。一日一音ずつ失っていくたびに現世を忘れ、「死」を受け入れるのです。

わたせ ちよっと！

ワタセ （わたせを見る）

わたせ 何も今ここで！

ワタセ 希望をもっているようですから。

わたせ いいじゃないですか、希望ぐらい！

ワタセ 希望―ぐらい？ この方々を待っているのは受け入れ難き現実のみ。

あなたもそれぐらい分かっているはずですが。

淳子 分かっています。

わたせ （何かを言おうとするが、先に淳子が話したので、話すのをやめる）

聡介 （淳子を見る）

淳子 分かっているんです。―でも、四十九日目の朝に千鶴に会えるんです。

一音しかなくても、千鶴に会えるんです。私はそ（れ）だけで十分…。

聡介 瀬田さん…。

淳子 病気が分かってから―残りの命が分かってから、私なりに千鶴に残してきたつもりです。でも、あの子きつと歩き出せないから、―最後に何か残せるなら、たった一音でも残せるなら想いを伝えられる…そう信じています。

聡介 俺は…(ワタセに)この雑誌めくれませんか？
ワタセ 無理です。

聡介 俺は文香に何も残せていない、あまりに突然だったから…でも、一つだけ一つだけ残しているんです。俺が文香に宛てた手紙がこの雑誌に…残したい…残してやりたいんです。

淳子 (わたせに)めくること出来ないんですか？
わたせ ……。

聡介 (ワタセに土下座をする) お願いします！ お願いします！
淳子 私からお願いします！

ワタセ (目をつぶる)
成島 (ロビーにやってくる) 瀬田様の控室はあちらになります。

民子 (やってくる) ホントびっくりしちゃった！ ね〜！
山下 (やってくる) そうだね。

民子 最後に姉さんの顔を見ようと思ったら、知らない人なんだもん！
山下 最初に見ておけばよかったね。

民子 だってお腹すいていたし。
山下 一生懸命おいなりさん食べる民子さん、素敵だったよ。

民子 も〜！
成島 …あの―

民子 はい？
成島 瀬田様をお呼びします。

民子 私も瀬田だけど？
成島 弟様を。

民子 いいわよ、このまま行くから。
成島 御親族にあたりますし、ステキな御召物ですので…。

民子 あら、ありがと。こんな場だし、かなり地味おさえたんだけどね。
成島 …そうですか。少しの間お待ちください。
民子 了解。

成島が瀬田家の控室に向かう。

民子は手持無沙汰をきらい、ソファ―に座ろうとする。

民子 (ゼクシイに気づき) 孝太君、これ。

山下 ゼクシイ？

聡介 (民子たちを見る)

民子 火葬場に―不謹慎ね。

山下 全くだね。

民子 (ゼクシイを手に取る)

聡介 ちよっと―

淳子 民子！ めくりなさい！

聡介 (淳子を見る)

民子 何か、気持ち悪いわね。

淳子 民子！

聡介 お願ひします！

民子 (ソファ―に置こうとする)

淳子 民子！

山下 結婚か。

民子 (手が止まる。山下を見る。)

山下 不謹慎かもしれないけど…いいよね。

民子 …いいわよね。

淳子 ナイス！

民子 ちよっとと見てみる？

淳子 そう！

聡介 お願ひします！

山下 でも、恥ずかしいなく。

淳子 恥ずかしくない！

聡介 お願ひします！

民子 でも、ちよっとだけ？

山下 ―そうだね。

淳子 早く！

民子と山下がソファ―に座り、ペラペラとゼクシイをめくる。

民子の手紙を見つける。

民子が不思議そうに手紙を手に取る。

聡介 それでは！

淳子 民子！

そこに夏樹と日山がロビーにやってくる。

夏樹 あ、姉貴。

民子 (立ちあがり) ちよっと、あんたのせい―

日山 (ゼクシイを手に取っているとところを見つけ) ああつ！

夏樹 何、見てるんだよ！

民子 だって、置いてたんだもん。

夏樹 (手に取っている手紙をめざとく見つけ) それ？

民子 中に挟まっていた。―ラブレターの的な？

日山 (無言で民子からひったくる)

民子 ちよっと！

聡介 文香に渡してください！

日山 (民子を気にせず、手紙を見る)

民子 何、この人！

山下 民子さん。

民子 だってえ！

夏樹 姉貴、この人は？

民子 マイ スイート ハニー (流暢に)

山下 ハニーです。

夏樹 は？

日山 夏樹さん！

夏樹 何も言うな、俺もびっくりしている。

日山 ちがうっす！

聡介 文香に！

日山 聡介君が文ちゃんに！

夏樹 (日山を見て、無言で手紙をひったくる。そして、読む。)

聡介 お願います。

淳子 夏樹！

民子 何なの？

夏樹 日山ちゃん！

聡介 文香に文香に！

日山 渡してきます！

聡介 お願います！

夏樹 任せた！ (手紙を渡す)

日山 (手紙を受け取り) はい！

日山が外に出て行く。

聡介 ありがとうございます！ ありがとうございます…ごきます。

民子 夏樹、淳子ちゃんの火葬なのよ！

夏樹 姉さんも理由を聞いたら許してくれるよ。

淳子 大丈夫、分かっているから。

民子 淳子ちゃんが許したって―

夏樹 はいはい。―まずは姉さんの顔見てやってくれよ。―急いで駆け付けたんだろ。

民子 ―そうね。(行こうとして、ゼクシイをソファ―に置き)―あら、あんた、数珠は？

夏樹 ああ、ちよっと。

民子 忘れたの？ 夏樹、あんた、少しは大人の常識を学びなさい。
夏樹 ……そうだね。

夏樹は首をひねりながら控室へ向かう。
その後を民子と山下がついていく。
ロビーには聡介、ワタセ、淳子、わたせが残る。

淳子 行かなくていいんですか？

聡介 ……恥ずかしいですから。

淳子 そうですか。

聡介 よかった…、あのままだったら危なく燃やされるところだった…。これで思い残すことはないな…

淳子 まだ、残っていますよ。

聡介 (優しく笑う) そうでしたね。―あと何日なんだろう…

ワタセ あと四十五日です。

聡介 長いな…。

淳子 私は―

わたせ 四十六日です。

淳子 ―こ(れ)から？

聡介 ―文香の傍にいます、何もできないけど…。あいつ、ずっと泣いているのかな…―湿っぽいのは嫌いなんです。

淳子 できるじゃないですか。―四十九日目の朝に…。

聡介 たった一音ですけどね…

わたせ 追伸ですね。

聡介 え？

淳子 ―追伸？

ワタセ (わたせを見る)

わたせ そうじゃないですか。生きているときに言い忘れたことを、伝えきれなかったことを、一音だけでも、残せます。想いとともに、残せます。

静寂がロビーを包む。

淳子 ―ステキですね。

聡介 ……追伸か。―いいな、それ。

わたせ はい。

聡介 (ワタセに) 何お文香に伝えたらいいですかね。

ワタセ ……。

聡介 わかっています。俺が考えることですよね。―そろそろかな。―変な感じですね…：自分が火葬されるのを見るのって。

淳子 私も―初めてですから。

聡介 (優しく笑って) 俺もです。―最後に自分を見てこようかな…。

淳子 ―いつてらっしゃい。

聡介 瀬田さんは強いな。

淳子 え？

聡介 喚き散らさないから…。

淳子 私は…千鶴に残してきたから…悔いはないんです。

聡介 ―行ってきました。

聡介が控室へと向かう。

そのあとをワタセが付いていく。

淳子 ……。

わたせ 私たちも―

淳子 そうですね…。

淳子とわたせは瀬田家の控室へ向かおうとする。

そこに、ワタセが現れる。

わたせが気付く。

ワタセ ……。

わたせ ―どうかしましたか？

わたせたちを暗闇が包む。

【瀬田家 玄関】

淳子死後から八日目。

淳子が失った音は「ろ」「れ」「ゐ」「ゑ」「を」「へ」「め」

瀬田千鶴が立っている。

千鶴の格好は外出できる状態である。

千鶴の背後には淳子とわたせが佇んでいる。

千鶴「行ってきます」の小さなおまじない。お母さんが私の名前を呼び、ほつぺをつねる。お母さんは決まってそのまま「女は？」と尋ねる。私が「笑顔」と答えると満足そうに手を離す。それが毎朝のきまり。入院中だって変わらなかった。私は大学に行く前にお母さんの病室を訪ねる。本当は大学になんか行きたくなかったし、ずっと一緒にいたかったけど、「あんたが行きたいって行ったんだから、しっかりやりなさい」って絶対に許してくれない。後ろ髪引かれる思いで「行ってきます」というと、お母さんは痩せこけた手で私のほつぺをつねる。そして、二人の合い言葉。「女は？」「笑顔」…そんな取りとめのないやり取りが、私の毎日だった。―お母さんがいなくなっって一週間が経った。―私のほつぺをつねる人はもういない…(千鶴は自分のほつぺ

をつねる。)

民子 (安っぽいフリースを着た民子が現れて) 何やってるの？

千鶴 (ほっぺから手を離し) ううん、何でもない。

民子 今日ぐらい休めば？ | というか大学は春休みじゃないの？

千鶴 (うそをつく仕草) | いろいろやることあるんだ。

民子 無理していいない？

千鶴 大丈夫だよ。

民子 だって、あんた |

山下 (エプロン姿で現れる) 民子さん、ご飯できてるよ。

民子 ありがと♪ (千鶴に) 食べた？

千鶴 うん。

民子 孝太君のご飯、超美味しいでしょ♪ 今日の朝ごはんは、なくな？

山下 オムレツ♪

民子 えく！ ケチャップでハートつけてくれる？

山下 もうつけてるよ。

民子 孝太君たらしく♪ ンく！ (キスをねだる) ンく！ (キスをねだる)

山下 まだ明るいよ。

民子 いけずく！ (千鶴の視線に気づき) | チズには刺激が強すぎるわね。

千鶴 おば |

民子 (目を見開いて千鶴を凝視する)

千鶴 民ちゃん。

民子 何？

千鶴 私は大丈夫だから |

民子 うん。

千鶴 その：戻った方がいいんじゃない？ 仕事忙しいんでしょ？

民子 (笑う) 何、気つかってるの！

千鶴 別にそういうわけじゃ |

民子 もう、家引き払ってきたし。

千鶴 え？

民子 淳子ちゃんと約束したの。千鶴が大学卒業するまで、私と夏樹でチズの面倒を見るって。 | 私はチズの生活、夏樹はそれ以外の細々とした所。

千鶴 そうなの？

民子 聞いてない？

千鶴 頼りなさいとは言われたけれど：一緒に住むとは：

民子 いいじゃない♪ いいじゃない♪ 私を淳子ちゃんと思っ、頼りなさ

い！ | 母親代わりみたいなの？

千鶴 ……。

民子 そうそう、明日から新聞三紙追加するから。日経・朝日・スポニチ。

千鶴 え？

民子 情報を制する者は世界を制す！ これ、常識。あんたもあと三年で大学

卒業なんですよ？ 勉強しておきなさい。

千鶴 | はい。|(フリース)それ？

民子 わかる？ 淳子ちゃんの。|入院していた時も着ていたものなんですよ。
千鶴 私が買ってあげたやつ。

民子 そう。どうりで淳子ちゃんにしては明るめの色だなと思ったんだよね。

千鶴 ないと思ったら、民ちゃん着ていたんだ：

民子 盛岡のこの時期寒いし、形見分け的な|

山下 民子さん、そろそろ時間だよ。

民子 ホント？ チズ、知ってた？ 夏樹が担当している番組、毎朝流れてい

るんですって！ :なんだかモーニング|

千鶴 フレッシュモーニング。

民子 それそれ！ せっかくだから聞かないとね。それじゃ、行ってらっしゃい♪

千鶴 |行ってきます。

民子 (部屋に行こうとして立ち止まり) 何時頃に帰ってくるの？ 晩御飯までには帰ってきなさいよ。

千鶴 はい。

民子 あ！ 昼間はいないから。ニトリ？ってところに行つて、必要な物諸々買ってくるから。(部屋に向かいながら山下に)他にもいろいろ見て回ろうか。

夏樹が勤めているラジオ局も教えてあげる。

山下 楽しみだな。

民子たちは部屋に入っていく。

千鶴 行ってきます：

千鶴はもう一度頬をつねる。

淳子は千鶴の頬をつねっている手に手を重ねて

千鶴・淳子 女は？

千鶴 笑顔：

千鶴は手を頬から離し、家を出ていく。

淳子 行ってらっしゃい。

わたせ あの：これ？(自分の頬をつねってみせる)

淳子 ああ、おまじないです。

わたせ おまじない？

淳子 わたしと千鶴のおまじない。

わたせ なるほど。|それにしても娘さん、強いですね。さすが、淳子さんゆ

ずりといえますか。―部屋を出る直前まで泣いていたのに、部屋を出るなりピタッと。

淳子 強くないんですよ、あの子。―ホントは泣き虫。小学生の頃は学校に行きたくない行きたくないって―だから、こうほっぺたつねって、笑顔にさせて：ずつとずつと続けたおまじないなんです。

わたせ (頬をつねって)「笑顔」

淳子 ……はい。

淳子とわたせは千鶴の後を追う。

【FMモリオカ】

聡介死後九日目。

聡介の失った音「あ」「多」「を」「わ」「え」「ろ」「ぬ」。

文香がラジオブースの中でフレッシユモーニングの収録をしている。ラジオの音が聞こえてくる。

聡介は文香をワタセは聡介を見ている。

文香 ラジオネームホノチャンパパさん。「今日は雛祭り。我が家でもお内裏様とお雛様がにっこりほほ笑んでいます。それを見ている娘もにっこり。―片付けるの遅らせようかな。―」お雛様を片付けるのを遅らせると、その分婚期が遅くなるっていいいますもんね。―私も遅く片付けられていたのかな、今度父に聞いてみたいと思います。今朝のフレッシユモーニングはここまで♪ 今から出かける方はいつてらっしゃい♪ お仕事の方はがんばって♪ 藤原文香でした。

番組が終わり、ジングルが流れる。

夏樹 (ブースに入ってくる)おつかれ。

文香 お疲れ様です。

文香は番組の構成が書かれた用紙などを整理している。
夏樹がそれを見ている。

文香 ? どうかしました?

夏樹 ……いや：(突然手を叩き)コーヒーでも飲むか?

文香 どうしたんですか、いきなり?

夏樹 いや：疲れたかなって思ってた。

文香 ――ありがとうございます。いただきます。

夏樹 おう。

夏樹はブースを出て行く。

文香 あ、おつかれさまです。
日山 (入ってきたながら) おつかれっす。

文香は片付け作業を続ける。
日山はそれを見ている。

文香 ? どうしたんですか?

日山 : あんまん食べる?

文香 (思わず吹き出す) なんなんですか? 夏樹さんも日山さんも。

日山 うん: いや: 何と言うか: そんな自分を卑下した言い方とか:

文香 なに?

日山 その:

文香 うん。

日山 あんまん、食べない。

文香 だから――

日山 聡介君は――

文香 (聡介の名前を聞き、一瞬顔から笑みが消える)

日山 その: 何と言うか:

文香 さっき話したことを気にしているんですか?

日山 残念なことだけど:

文香

夏樹 (入って来て) ! コーヒ: 机に置いておきな。(出て行く)

日山 ごめん。

文香 (イスに座り) どうなっていたかわかりませんよ。

日山 え?

文香 聡介と。

日山 文ちゃん。

文香 だって、まだ学生だったし――

日山 就職決まっていたじゃない。

文香 口約束だけだったし:

日山 でも、あの手紙:

文香

日山 ごめん。

文香 | すみません、作業したいので:

日山 作業? 手伝うよ。

文香 | 一人でしたいんです。

日山 あ: ごめん:

文香 いえ:

日山がブースを出て行く。

文香 …… 聡介…

文香が身体を震わせながら静かに泣く。
聡介はそんな文香を後ろから抱き締める。

聡介 ごめん…ごめん…

しかし、聡介の声は文香には届かない。
文香はますます強く、しかし声を押し殺して泣く。

聡介 文香！ 俺はここに！ ここに！ 文香！

文香と聡介を暗闇が包む。

【大学中央食堂前】

時間は過去へと遡り、千鶴が淳子と大学見学をしている。

淳子 はあ、変わったわ。

千鶴 ふくん。

淳子 図書館の前に芝生があったの。

千鶴 駐車場のところ？

淳子 そう。憩いの場。

千鶴 憩いの場って、フルツ！

淳子 それじゃ、今は何て言うの？

千鶴 …… 憩いの場かな。

淳子 (笑う) 同じじゃない。

千鶴 (誤魔化す感じで) あれ？

淳子 座る？

千鶴 うん。

淳子 暖かい日なんて、講義さぼって友だちとおしゃべりしたり本読んだり—

千鶴 お母さんもさぼるの？

淳子 時々。

千鶴 んじゃ、私も。

淳子 ダメ！ 入学する前から何言ってるの。

千鶴 何で？

淳子 学費ってバカにならないの。さぼられたら頭にきちやう。

千鶴 何それ？ ずっる！

淳子 (笑う) もう少しすると桜が咲くかな。

千鶴 すぐそらす。

淳子 チュ、
千鶴 なに？。

淳子 この桜ってすっごいきれいな。—お母さん、好きなんだ。

千鶴 へ。見に来ようよ。土日でもいいし、講義が休みの時でもいいし。

淳子 そうね。

千鶴 お弁当作って—お花見？的な。

淳子 いいわね。—チュ。チュが二年生になったら、お花見しながらお酒飲もう。

千鶴 いいね。

淳子 来年か。

千鶴 別に今年でもいいけど。

淳子 何言ってるの、まだ未成年でしょ。

千鶴 二年生になっても、まだ二十前です。

淳子 それは、いいのよ。

千鶴 ブルッ！ ねえ、ねえ—

淳子 なに？

千鶴 お父さんとも、ここでデートしたの？

淳子 —それは飲みながらじゃなきゃ話せない。

千鶴 いいじゃん、今でも！

淳子 ノド乾いちゃった、何か買ってこようか？

千鶴 そうやって、すぐ誤魔化す！

淳子 いる？

千鶴 それじゃ、入学祝いということ。

千鶴 ええっ！ 違うのがいい！

淳子 けっ！ (決定)

淳子がベンチを立って、飲み物を買に行く。

千鶴 (立ちあがりながら) もう！ 私、ココア！

時間が現在に戻る。

千鶴 他愛のない約束…。当たり前のように来年がくると思っていた。—お母さん、私、もうすぐ二年生になるよ…。桜も咲き始めるよ…。お母さん…。

千鶴が自分の身身体を強く抱きしめる。

そこに咲がやってくる。

咲 ちづる！ (千鶴に抱きつく)

千鶴 — 咲…。

咲 千鶴…心配してたんだよ。メールしても返信来ないし。

千鶴 ごめん…昨日までいろいろ大変で…

咲 いいのいいの。—ちづる〜！（また抱きしめる）

咲が泣き始める。

咲 ご飯食べてる？ 寝てる？ ちづる〜！ ママがね、千鶴は絶対つらいって！ 可哀そうだって！

千鶴 大丈夫、大丈夫だから泣かないで。

咲 （泣きべそをかきながら）ホント？

千鶴 うん。

咲 私たち親友だからね。

千鶴 うん。

咲 苦しかったら何でも言ってね。

千鶴 うん。

咲 あゝ、いっぱい泣いたらお腹すいちゃった！ 学食でご飯食べよ！

千鶴 —うん。

咲が千鶴の手を引っぱって中食の中に入っていく。

【文香の部屋】

聡介が交通事故で命を落とす前。

二人の声だけが聞こえてくる。

文香 なくに？

聡介 ん？

文香 ちよつと、仕事の邪魔なんですけど。

部屋の様子が見えてくる。

聡介が文香のことを後ろから抱き締めている。

聡介 ありがとう。

文香 何が〜？

聡介 見た。

文香 何を？

聡介 冷蔵庫の中。

文香 見られた。

聡介 もらえないのかと思った。

文香 お口にあえば嬉しいけど。

聡介 —いつ作ったの？

文香 昨日。―寝ないで。

聡介 マジで？ 超嬉しいんだけど。

文香 食べる？

聡介 おう。―あのメッセージ書かれているのも食べられる？

文香 ヤギかつ！

聡介 メェく、ウメェく！

文香 (笑う) よし、食べよう。

聡介 俺、持ってくる。―コーヒーでいい？

文香 お、優しいね。

聡介 それほどでも。

聡介が文香から離れる。

聡介が台所に行こうとして、立ちどまり

聡介 俺も文香とずっと一緒にいたいよ。

文香が机にうつ伏せになりながら

文香 幸せ：

聡介 なにく？

文香 何でもなく！

文香が目を閉じる。

【FMモリオカ】

いつの間にか聡介とワタセはいない。

文香は泣き疲れたのかウトウトと寝ているようだ。

ふいに携帯がなる。

文香は急いで携帯を取る。

文香 聡介？

里佳子 ―ごめん、私。

文香 里佳子：今、何時？

里佳子 ん？ 今、十時半。

文香 え？ 学校は？

里佳子 休み時間。

文香 そっか。

里佳子 大丈夫？

文香 大丈夫。―何？

里佳子 今日、夕飯どう？

文香 いいねく。

里佳子 それじゃ、また後で電話かメールする。

文香 OK!

里佳子 |ねえ、しつかり食べてる？

文香 大丈夫だよ、ありがと。

里佳子 うん。じゃ、夜に。

文香 はくい。

文香、携帯を切る。

文香は少し虚ろになる。

そして、机に上の用紙を持って、ブースを出て行く。

【火葬場】

時間は、火葬の日に戻る。

ワタセが立っている。

わたせがやってくる。

わたせ 何ですか？

ワタセ 相手の方は？

わたせ 控室で娘さんの傍にいます。

ワタセ そうですか。

わたせ ……。

ワタセ ……。

わたせ ……。

わたせ あの— あなたは自分の役目を分かっているのですか？

ワタセ どういうことですか？

わたせ 分かっているのですか？

わたせ 分かっているつもりです。

ワタセ (目を閉じる)

わたせ 離れていていいんですか？ | (行こうとする)

ワタセ なぜ希望をもたせるのですか？

わたせ (立ち止まりワタセを見る)

ワタセ 彼らには希望はありません。死んだのですから。

わたせ でも、四十九日目の朝に会えます。

ワタセ どれほどの人が想いを告げられましたか？

わたせ ……。

ワタセ どれほどの人が？

わたせ 中には—

ワタセ 追伸ですか。|一音で何を伝えるというのですか？ 相手は想いを受

け止めていましたか？ 四十九日目の朝、何も発さずただただ立ちつくす者

ばかりではありませんでしたか？ 会うことを諦める者も少なくありません。

|彼らは生まれ変わるので。記憶は残りません。それならば、静かに死を

受け止めさせるべきです。私はそう思います。

わたせ・・・。

ワタセ それでは。

わたせ それでも――

ワタセ （立ち止まる）

わたせ 私は想いを告げられると思っています。

ワタセ （わたせを見る）

わたせ 私はそれを助けます。

ワタセ 贖罪ですか？（つい口からでてしまった言葉に自分で驚く）

わたせ ？ 贖罪？

ワタセ ―何でもありません。―わかりました。

わたせ 淳子さんのところへ戻ります。

わたせが行こうとする。

ワタセ 楽しみにしています。

わたせ （立ち止まる）

ワタセ どんな音を残すのか。

わたせ （控室へ向かう）

ワタセ （立ちすくむ）

時間が現在に戻る。

【パスタ屋】

文香と里佳子が向かい合って食事をしている。

文香の隣には聡介が座っている。

聡介死後十九日目。

聡介が失った音

「る・ゑ・を・め・え・ろ・ぬ・せ・む・て・り・け・き・ひ・の・
た・さ・ほ・る」

里佳子 美味しかったね。

文香 うん。

里佳子 お腹一杯。

文香 ありがと。

里佳子 ―何が？

文香 毎日夜飯誘ってくれて。

里佳子 こっちこそ、仕事の愚痴ばかりでごめん。

文香 全然。

里佳子 卒業式過ぎたら、少しは時間できるから、旅行に行こうか？

文香 いいね！

里佳子 どこがいいかな？
文香 私は――

里佳子の携帯が鳴る。
里佳子は携帯のディスプレイを見て、表情が曇る。

里佳子 保護者だ：何だっつうの、こんな時間に。――ちよっと、ごめん。
文香 うん。

里佳子は席を立つ。

文香は少し虚空を見る。

【文香の記憶】

二人の会話が聞こえてくる。

聡介 どこがいいかな？

文香 私は：温泉かな。

聡介 いいね！

文香 (吹き出す) 卒業旅行が温泉でいいの？

聡介 何だよ、文香が言ったんだろ。

文香 聡介はないの？

聡介 文香と一緒にならそれでいいよ。

文香 何だそれ？

聡介 あ、カレーでいい？

文香 え？

聡介 ホワイトデーのお返し。――俺、作るから。

文香 : なんとというかさ――

聡介 うん。

文香 そういうこと言わないのさ。

聡介 え？

文香 そういうのは黙っておくの。

聡介 そうなの？

文香 そうなの。

聡介 (笑いながら) 次から。

文香の中で思い出された会話は消えて行く。

文香は手を強く握りしめ、唇を強くかむ。

文香の身体が小刻みに震えだす。

それを見た聡介は驚く。

聡介 文香、どうしあ？ 文香！

聡介はなぜ泣き始めたか分からない。
聡介は思わず助けを求めるようにワタセを見る。

ワタセ (聡介を静かに見つめている)

聡介 (文香の肩をつかむ) どうしあ? あいじょうぶ、あいじょうぶあ! (「ど
うした? 大丈夫、大丈夫だ!」)(立ちあがり、里佳子を呼ぶ) いかこあん!
いかこあん! 文香お! 文香お! 文香、あいじょうぶ! あいじょう
ぶ!

そこに里佳子が戻ってくる。

里佳子 文香!

聡介 いかこあん! 文香が! 文香が!

里佳子 (文香を優しく包みこみ) どうした?

文香 カ…レーが

里佳子 ん?

文香 カレーがあるの…

里佳子 カレー?

文香 聡介が…

里佳子 うん

文香 明日、私に作ってくれるはずだった…

里佳子 明日?

文香 お返しの…

里佳子 お返し?

文香 (強く里佳子を握り締める)

聡介 あやか…

里佳子 大丈夫…

文香 そうすけ…

聡介 ごねん…

里佳子 大丈夫だから…

聡介 ごねん…

文香 そうすけ…

里佳子 文香…

文香 そうすけ…

聡介 おれはここに…(崩れ落ち) おれはここに!

聡介たちを暗闇が包む。

【瀬田家】

一年前。

ラジオ番組「フレッシュモーニング」が流れてくる。

文香 ラジオオネーム水野ナベブタ子さん。「気づくと娘もこの春から大学生。あつという間でした。きつと卒業もあつという間。巣立つのが待ち遠しいやら来て欲しくないやら。やっぱりもう少しの間、すねをかじっていて欲しいな。」春は別れと出合いの季節といえますもんね。でも、もうすこし一緒にいたいと思うのは間違いじゃない♪ ナベブタ子さん、もう少し、すねをかじられちゃってください！ 今朝のフレッシュモーニングは一旦ここまで♪ 八時から東京のスタジオに戻して、また、皆さんに声を聞かせるのは八時二十分から！ 今から出かける方はいつてらっしゃい♪ お仕事の方はがんばって♪ 藤原文香でした。

「フレッシュモーニング」のジングルが流れる。

番組を聞いていた淳子が小さくガッツポーズをする。

そこにコートを着た千鶴が慌てて駆けこんで来る。

千鶴 ねえ、やぎ座何位？

淳子 わかんない。

千鶴 見ていてってお願いしたじゃん。

淳子 いつも通り起きればよかったじゃない。

千鶴 なんで起こしてくれなかったのよ！

淳子 あんたが言ったんでしょ。「大学生になったら、自分で起きるから」って。

有言実行！ 一度決めたことはやり通す！ これ、淳子流！

千鶴 まだ高校生です。

淳子 はいはい。

千鶴 だいたいラジオってなに？ めざましでしょ、普通。

淳子 チーはいつつもこの時間いないでしょ。

千鶴 そうだけどさ。

淳子 この番組ね、夏樹が担当しているんですって。

千鶴 おじちゃんが？

淳子 そ。

千鶴 おじちゃんも出世したね。

淳子 なにしみじみしてるの、時間。

千鶴 やば！

淳子 咲ちゃんと？

千鶴 うん。

淳子 いつてらっしゃい。

千鶴 ほく。

淳子 チー。

千鶴 ん？

淳子が千鶴のほっぺをむにとつまむ。

千鶴 行ってきまふ。

淳子 女は？

千鶴 笑顔。

淳子 よろしい。笑顔が一番！

（手を離す）今日、一緒に入学する人達と初

めて会うんでしょ？

千鶴 うん。

淳子 いつもより三割増しで。

千鶴 （満面の笑顔）こう？

淳子 かえって怖い…

千鶴 （悔しがって）きーっ！ もう、時間ない！ んじゃ！ （行こうとす

るが）—あ、携帯！

淳子 いいじゃない、携帯ぐらい。

千鶴 ぐらいじゃないの！

淳子 彼氏とメール？

千鶴 —ブログとかツイッターとか友だちとメールとか、いろいろと必要な

です！

淳子 はいはい。—時間ないって言わなかったかしら？

千鶴 なに？

淳子 何でも！—部屋？

千鶴 部屋。

淳子 親こきつかって〜！ 少しは感謝とかごめんなさいとかさういう—

千鶴 おねが〜い♪ おかあたま〜！

淳子 仕方ない子ね。（行こうとして立ち止まる）ち〜、入学祝何がいいか考えていて。

千鶴 （いたずらっぽく）この前のココアじゃないの？

淳子 もう少し、スネかじらせてあげようじゃないか。

千鶴 （笑いながら）何それ。

淳子 こっちの話♪

淳子が千鶴の部屋に行く。

【瀬田家】

時間が現在に戻る。

千鶴 お母さん、お母さんがいなくなって三週間が経ったよ。もう会えないってこんなにも辛いんだね…。お父さんが死んだ時、お母さん、ホントはすごく辛かったんだね…。私、知らなかった。—ねえ、お母さん、私、お母さんがいなくなった時に決めたんだ。私、どんなに悲しくても人前では絶対に

泣かないで笑顔でいる！ だって、笑顔が一番なんだよね。…（手で頬をつねり）

淳子とわたせが千鶴の近くにいる。

淳子が千鶴の手に手をのせる。

淳子 女は？

千鶴 でも、おまじないがないと笑えない…笑えないんだ…

淳子 千鶴…（手を離す）

淳子が亡くなってから二十二日目。

淳子の失った音「さ・し・す・と・ぬ・ひ・ふ・へ・む・め・も・や・ら・り・れ・ろ・わ・ゐ・ゑ・を」

民子がかけてくる。

民子 （頬をつねっている千鶴を見つけ）また、つねってる。

千鶴 （急いで手を離す）

民子 何かのおまじない？

民子が千鶴の両頬を両手で掴む。

民子 たてたてよこよこマルかいてちよん！ —なくんてね。—（携帯を渡し）はい！

千鶴 —ありがとうございます。

民子 いい加減他人行儀なこと言うのやめてよ、家族なんだから。

千鶴 —ごめんなさい…

民子 —携帯、最近持ち歩いていないでしょ。連絡とれないと不便なの。昨日だって遅かったでしょ？ 基本的には放任主義のつもりよ。言い大人だし。門限なんて作るつもりもないけど、あんまり心配させないでよ。

山下が出てくる。

山下 民子さん、何か捨てるのがある？

民子 私はない。—チズは？

千鶴 ？

民子 今日、ゴミの日でしょ。

山下 まだ入るから、何かある？

千鶴 特にはないです。

民子 孝太君、カーテン。

山下 不用心だから、買ってからにしようかなって。（引っ込む）

民子 そうね。さっすが。

千鶴 カーテン？

民子 あれ、変えるって言ってなかった？ 明るめの色にするから。――希望ある？

千鶴 ！特には！

民子 (じっと千鶴を見る)

千鶴 なに？

民子 遠慮してない？

千鶴 え、別に！

民子 してるでしょ。

千鶴 してないよ！

民子 そう？

千鶴 うん！

民子 ならいいけど。――今日も大学？

千鶴 うん。

民子 まだ春休みじゃないの？――そんなにやることあるの？

千鶴 (ウソをついている仕草) うん。

民子 そう。早めに帰ってきなさいね。――こここの所、ゆっくり話してないじゃない？ お酒飲みながら――淳子ちゃんのことでも。

千鶴 ―そうだね。

民子 行ってらっしゃい。

千鶴 ―行ってきます。

千鶴は逃げるように家を出ていく。

民子は閉まった扉を見続けている。

山下がゴミ袋を持って出てくる。

山下 けっこう、スキスキになっちゃったなく。――民子さん？

民子 あの子、がまんしてる！

山下 え？

民子 どうしたらいいんだろう！淳子ちゃんならどうしたんだろう！

山下 民子さん！

民子 っつて、私がこんな暗い顔してちゃダメよね！ さ、ご飯食べて、今日やることやろう！

民子たちは部屋に向かう。

【大学】

千鶴がベンチに近くに佇んでいる。

淳子たちはそれを見ている。

千鶴 私はどこにいたのだろう……。私はお母さんの隣にずっといた：お母さんのぬくもり、お母さんの匂い：私がいたところはお母さんの隣だった：今の私に居る場所はない：私は独りなんだ：これからずっと独りなんだ：

そこに咲が暖かい飲み物を持って出てくる。

咲 はい。（飲み物を渡す）

千鶴 —ありがとう。

咲 私、思ったんだけど、そのおばちゃんたち、乗っ取るうとしているんじゃない？

千鶴 乗っ取る？

咲 家を。—だって、カーテンの色を勝手に変えるんだよ。カーテンでさ、：大事じゃない。だって、：ママなんて言ってたかな：（携帯を取り出しながら）飲み物買いに行く時、メールしてみたんだよね：そうそう、「カーテンってその家の雰囲気を表すものだから、変えるってのはよっぽどのことね」だって。

千鶴 そうなんだ。

咲 それに、この前、ネットできるようにしたんでしょ、無断で。

千鶴 うん。

咲 勝手に変えさせちゃダメだよ。—お母さんの思い出が無くなってくよってママが言ってた。

千鶴 —うん…。

咲 あ、千鶴、まだコースの希望用紙出していないでしょ。

千鶴 ああ：

咲 掲示板に名前貼り出されていたよ。迷ってるの？—一緒にアジア文化にしようって言ったでしょ。早く出さないと：二年生になれない：だったかな。

千鶴 （ウソを言う仕草）忘れてた：

咲 仕方ないなく。一緒に行こ。

咲が立ち上がり、千鶴の手を取り行こうとする。

千鶴 （ウソをつく仕草をしながら）あ、私、トイレ行ってから行くから、先に行ってて。

咲 一緒に行く？

千鶴 いいよ。

咲 学生課で用紙もらってるね。

千鶴 ありがと。

咲が駆けて行く。

千鶴はその後を見送り、別の方向へ駆けて行く。

それを見ている淳子とわたせ。

わたせ あれ？ どこ行くんでしよう？

淳子 ちづる、うそついてる。

わたせ うそを？

淳子 はい。

わたせ 分かるんですか？

淳子 くせ、あるから。

わたせ はあ、そういうものなんですね。

淳子 がんばって：がんばって：

わたせ 千鶴さんがんばって！

淳子 ：がんばって：

わたせ 千鶴さん！

淳子 がん：

淳子は声をだすのをやめる。

わたせは淳子を見る。

淳子 千鶴に聞こえない：聞こえない：

わたせ (淳子を見る)

淳子 聞こえないの：おおかなの？

わたせ はい：千鶴さんに淳子さんの声は聞こえません。：届きません。

淳子は千鶴を追って走り出す。

わたせはそれを見る。

わたせ 今は：届きません：。

わたせは淳子の後を追う。

【FMモリオカ】

聡介死後三十五日目。

淳子死後三十四日目。

文香がフレッシュモーニングの番組を行っている。

文香 ラジオネームエリリンさん「文香さんおはようさんです」おはようさんです。「ずっと前に彼氏とのことでメールしたの覚えていますか？」覚えていますよ。確か大学生の彼氏さんがいたんですよね。「すつごく嬉しい報告です！ この間、彼氏が大学の卒業式だったんです。彼氏は東京で就職が決まっています、遠距離になるのかなって思っていたら、なんと、プロポーズされたいんです！ 一緒に来て欲しいって！ 私、すつごく嬉しくて、後先考えず

にOKしちゃいました！ 一番に文香さんに報告したくてメールしちゃいました！」—エリリンさん、おめでどう！ もう、幸せオーラ全開のメールですわね！ 妬けちゃうな〜！ 末永くお幸せに！ 私もエリリンさんに続いて幸せ報告できるようながんばっちゃいます！ その前に相手探さなくちゃ！ 今朝のフレッシュモーニングはここまで♪ 今から出かける方はいつてらっしゃい♪ お仕事の方がんばって♪ 藤原文香でした。

日山が夏樹を引っぱってくる。

夏樹 なになになに？

日山 どういうつもりですか？

夏樹 なにが？

日山 今朝のメール。

夏樹 メール？ 日山ちゃんに俺メールした？

日山 違いますよ！

夏樹 怒るなよ。何？

日山 番組最後のメールつすよ。

夏樹 —ああ。

日山 なんて、あんなメール読ませるすか？ なんて、あんなデリカシーのないことできるんすか？ 聡介君が死んで、文ちゃん辛い思いしてるんすよ。

夏樹 ……。

日山 謝ってください。

夏樹 あ？

日山 文ちゃんに謝ってくださいよ。

夏樹 なんて。

日山 なんて？ だから—

夏樹 日山ちゃん、考え違いすんなって。俺たちはさ、—仕事してんの。リスナーの声をラジオにのせて届けんの。—いつまでも引き摺ってられないんだよ。

日山 だからって！

日山が夏樹の胸倉を掴む。

夏樹 ちよっちよっちよ！

文香 日山さん！

文香が出てくる。

その後を聡介とワタセが出てくる。

日山 文ちゃん。

文香 私がお願いしたの。

日山 (夏樹の胸倉から手を離しながら) え？

文香 私があのメールを読むって言ったの、夏樹さんに。

日山 え？

文香 夏樹さんはやめようって言うてくれたんだけど。

日山 (夏樹を見る)

夏樹 (日山から視線を逸らす)

文香 心配してくれてありがとございます。でも、あれから一カ月以上経ったんですよ。大丈夫。

日山 大丈夫じゃないでしょ。

文香 …。

日山 無理しなくていいよ。

文香 無理してないです。

日山 寝てないんでしょう？

文香 え？

日山 食べてないんでしょう？ | 俺、知ってるよ。泣いたっていいじゃない。無理して強がらなくていいよ。

夏樹 日山ちゃん。

日山 聡介君のこと無理して忘れようとしているんじゃない？

夏樹 日山。

日山 俺も一緒に—

文香 違う…

日山 え？

文香 忘れようとしているんじゃない…消えていくの。

聡介 あやか…？

文香 聡介の手のぬくもり…聡介の声…

聡介 あやか…

文香 聡介の笑顔…少しずつ消えていくの…思い出そうとしても思い出せなくなっていくの…どうすればいいの？ どうすれば消えないの？ 教えてよ…

日山 文ちゃん…

文香 あの手紙だつて…ずっと一緒にいようって…ウソ…

聡介 いがう… (違う)

日山 違うよ文ちゃん…

文香 ウソ…

聡介 いがう…

日山 (文香の肩をつかみ) 大丈夫だから…元気出して…

文香は何も言わずに日山の手をはらいのけ、駆けて行く。

日山 文ちゃん！

日山が後を追うとするが、夏樹が肩を掴む。

日山 なんすか？

夏樹 やめとけて。

日山 心配じゃないんすか！？

日山は夏樹の手を払いのけ、文香の後を追う。

夏樹 お前の場合、それだけじゃないだろ…。

聡介は駆けて行った文香と日山の背中を見ている。
ワタセはじっと聡介を見ている。

千鶴 おじちゃん…

夏樹 !

千鶴がFMモリオカに入ってきている。
その後を淳子とわたせがついてきている。

ワタセ (わたせを見る)

わたせ (ワタセに礼をする)

ワタセ ……。

聡介 (淳子に気づく)

淳子 (千鶴を見ていて、聡介が目に入らない。)

千鶴 仕事中ごめん。

夏樹 ああ…え？ どうやって入ってきたの？

千鶴 受付で聞いて。

夏樹 おお、学校は？ 春休みか。―連絡くれてた？ (携帯を見るが、着信がないので)―どうした？

千鶴 ……。

夏樹 あ、ああ、明日、三十五日目だもんな。明日の朝は墓参り行くから。―先週は一緒に行けなくて悪いな。―でも、行ってたから。

千鶴 泊めてもらえる？

夏樹 は？

千鶴 おじちゃん家に。

夏樹 いやいやいや…ダメだろ。

千鶴 どうして？

夏樹 どうして…どうしてだろ。―家あるだろ。姉貴たちもいるだろ。
千鶴 ……うん。

夏樹 …何かあったか？

千鶴 (ウソをつく仕草) 別に…。ほら！ 民ちゃん、彼氏さん連れてきてるから、たまには二人だけの時間を作ろうかなって！

夏樹 そんなの気にするなって。

千鶴 そうだよね。

夏樹 おお。

千鶴 ……。

夏樹 ……。

千鶴 おじちゃん。

夏樹 ん？

千鶴 民ちゃんたちが私と一緒に住むって知ってたの？

夏樹 ああ、そういうことになってた。

千鶴 そうなんだ…。

夏樹 | どうした？

千鶴 なんでもない。| ごめんね、仕事中。

夏樹 おお。

千鶴 ……。

夏樹 ……千鶴？

千鶴 あのさ、お金貸してもらえる？

夏樹 え？

千鶴 ううん！ 何でもない。

夏樹 いや、別にいいけど|

千鶴 大丈夫！ 何でもないから！ ごめんね！

千鶴が走って出ていく。

夏樹 千鶴！ ……。

夏樹は千鶴が駆けて行った方を見ている。

夏樹は何か考え事をしているようだ。

淳子も千鶴が駆けて行った方を見ている。

淳子は千鶴を追おうとしない。

わたせは淳子を見る。

淳子は夏樹を見ている。

聡介が失った音↓三十三音

「え・き・け・こ・さ・す・せ・そ・た・ち・つ・て・と・な・に・
ぬ・ね・の・ひ・ほ・ま・み・む・め・も・よ・り・る・れ・ろ・る・
ゑ・を」

淳子が失った音↓三十二音

「く・け・さ・し・す・せ・そ・て・と・に・ぬ・ね・の・ひ・ふ・へ・ほ・ま・む・め・も・や・ゆ・よ・ら・り・れ・ろ・わ・ゐ・ゑ・を」

夏樹は「FMモリオカ」内のソファ―に座り、携帯を取り出す。

携帯を開くが、閉じる。

夏樹は何か思案中である。

淳子 あつい―（夏樹）

聡介 あお（あの）：あお（あの）：

淳子が声の方向を向くと聡介がいた。

淳子は聡介に寂しげな微笑みを浮かべ、礼をする。

聡介も淳子に礼をする。

聡介 いいんへうか？（いいんですか？）

淳子 ？

聡介 いいんへうか？（いいんですか？）

淳子 （聡介の言っていることが理解できず、申し訳なさそうな表情をする。）

聡介 （ワタセを見る）

ワタセ （聡介を見る）―いいんですか？

淳子 え？

聡介 ううへあん、おおわあくて。（娘さんを追わなくて）

ワタセ 娘さんを追わなくて。

淳子 ：おういたあ、いいか、はかあなうえ（どうしたらいいかわからなくて）

わたせ どうしたらいいかわからなくて：

聡介 おくお、へう（僕もです）

ワタセ 僕もです。

淳子 （聡介を見つめる。）

聡介 あいお、おおしあら、いいんへしおうか（何を残したらいいんでしょうか）

か）

ワタセ 何を残したらいいんでしょうか？

聡介 おおう、いい、あうんへしおうか（残す意味あるんでしょうか）

ワタセ 残す意味あるんでしょうか。

静寂が四人を包む。

わたせが淳子を見つめている。

淳子 あかりあえん：（分かりません。）

わたせ ：分かりません：。

再び静寂が四人を包む。

夏樹がふとソファから立ちあがる。

ロビーを思案顔でうろつくが、意を決したように携帯を開く。
不意に夏樹の携帯が鳴る。

【FMモリオカ屋上】

文香がふらふらと歩いてくる。

どうやら屋上の手すりを乗り越え、屋上の縁を歩いている。

文香は地上を見下ろし、ゆっくりと空を見る。

【FMモリオカロビー】

夏樹は携帯が突然鳴り、驚くが着信相手を見て、急いで取る。

夏樹 あ、姉貴。ちょうどよかつー。ーえ？ーああ、ついさっきまでここに。

ーなに？ー家を出たって：どうということだよ！

聡介 （淳子を見る）

淳子 （静かに夏樹を見ている）

夏樹 しっかり見てろよ！ 姉さんの代わりに千鶴を支えるって約束だったろ！ーいい、探してくる。まだ遠くには行ってないはずだ。ー姉貴は家にいてくれ。

日山 （息を切らせて駆けこんでくる） 夏樹さん！

夏樹 （日山の方を向き） なに！？ 俺ー

日山 文ちゃんが屋上に！

夏樹 え？

聡介 ！ あやか！

聡介が急いで日山が来た方向へ走り出す。

日山 カギをかけられてー

夏樹 ー守衛さんに！

日山 はい！

日山と夏樹が聡介とは反対方向に走り出す。

淳子が聡介の後を追って走り出す。

わたせも追おうとするが、一度ワタセを見る。

ワタセ 行ったところで私たちには何もできません。

わたせ 分かっています。それでも、彼の気持ちをー

ワタセ 彼は私を憎むでしょうか？

わたせ

ワタセ 私がいなくては扉を開けられません。彼女が亡くなったのならば、彼は私を憎むでしょうか？

わたせ・・・。

ワタセ 私はそれでいいと思っています。何もできない現実に絶望し、その過程で誰かを憎むことで少しでも気が済むのなら、憎まれてもいい、そう思います。―あなたは感謝されたいのですか？

わたせ 感謝？

ワタセ はい。

わたせがワタセをおいて、淳子の後を追おうとする。

ワタセ 違うのですか？

わたせ (立ち止まる)

ワタセ (じっとわたせを見る)

わたせ 私は信じたいのです。―人の想いを。―想いが伝わることを。―ただ、それだけです。

わたせが淳子の後を追う。

ワタセはしばらく虚空を見つめるが、聡介の後を追う。

【FMモリオカ屋上】

文香が屋上の縁にぼんやりと立っている。

文香の心の中で聡介の言葉が降り注いでいる。

【屋上に通じる階段】

聡介ががむしゃらに屋上に向かって階段をあがっている。

聡介 (声) 文香と一緒にならそれでいいよ。

聡介 文香！

聡介 (声) (笑いながら) 次から。

文香 ウソ！

聡介 文香！

聡介 (声) 文香。

文香 ウソ！

聡介 (声) 文香！

文香 聡介！

聡介が屋上の入り口に着く。

聡介 文香！

聡介がドアノブを触るが回る気配はない。

聡介は扉に体当たりするがまったく開く気配はない。

聡介 文香！

文香は聡介からもらった手紙を開く。

聡介（声） 俺も文香とずっと一緒にいたいよ。

文香 ウソ：

聡介（扉に体当たりしながら） 文香！

聡介（声） 文香。

文香 一緒にいるって言ったじゃない：

聡介（扉に体当たりしながら） 文香！

文香 この手紙読んで聞かせてよ：

聡介（扉に体当たりしながら） 文香！ …（崩れ落ちて）あへか…（「誰か」）

文香 聞かせてよ：

聡介 あへか、あうへへ（誰か助けて） 文香お：

文香 聡介：

聡介 あうへへ、うああい…（助けてください）

文香 そっちに行けば：

聡介 文香！

文香 読んでくれる…？

聡介 文香ああああ！

日山 文ちゃん！

日山が扉の前に駆けこんでくる。

聡介 いあああん！（日山さん）

日山は扉を開ける。

日山は扉を開けると文香に向かって駆けよる。

聡介は日山の後に屋上に入る。

日山 文ちゃん！

聡介 文香！

日山は文香を掴むと力強く引っ張り寄せる。

聡介 文香！

文香 離して！

文香が日山の腕の中で必死にもがく。

聡介 あやか：

文香 離してよ！

日山 離さない！

文香 離して！

日山 何があっても離さない。

聡介 （日山を見る）

そこに夏樹が駆けこんでくる。

夏樹は息も絶え絶えである。

夏樹 | 間に合ったか：

文香 いやあ！

日山 聡介君は離れたくて離れたわけじゃない！

文香は暴れるのをやめる

淳子とわたせとワタセが遅れてやってくる。

日山 | ウソをつきたくてウソをついたわけじゃない—死にたくて死んだわけじゃない！

文香 …。

日山 生きなきゃ！ 生きなきゃダメだよ！ 文ちゃんが生きなきゃ！ 誰が

聡介君を思い出すんだよ。

文香 私が思い出すの…？

日山 そうだよ。

文香 思い出せるの…？

日山 一緒に思いだすよ。—夏樹さんも。

夏樹 | おお。

日山 だから、バカなことはやめよう。

文香は崩れ落ちて、静かに涙を流す。

日山はそれを優しく、落ち着かせる。

聡介はそれをただただ見ている。

夏樹も日山と文香を見ている。

聡介はただただ文香を見つめるしかない。

淳子はゆっくりと空を見上げる。

わたせは淳子を見つめる。

ワタセは聡介を見つめる。

全てを暗闇が覆い尽くす。

【瀬田家】

時間は前後し、淳子が亡くなって三十三日目。

民子と山下が部屋で千鶴が帰ってくるのを待っている。

民子はイラついているようで、おとなしく座ってられない。

山下 民子さん。

民子 | 大丈夫、大丈夫。

民子は座りなおす。

そこに千鶴が帰ってくる。

そのあとを淳子とわたせが入ってくる。

千鶴は誰もいないと思つて部屋には入ってきたら、民子たちがいて、少々戸惑う。

千鶴 | ただいま…。

山下 おかえりなさい。

民子 座りなさい。

千鶴 え？

民子 座りなさい。

千鶴 | はい…。

千鶴はバッグをおろし、そのバッグを胸の前に抱き、座る。

民子 今日、どこに行っていたの？

千鶴 (うそをつく仕草) 大学…

民子 | チズ、どこに行っていたの？

千鶴 (うそをつく仕草) 大学だよ…

民子 本当のこと言いなさい！

千鶴 : 本当だよ…

民子 大学から電話があったよ。コースの希望用紙？ まだ出してないって。掲示板に張り出しても、携帯に電話しても連絡が取れないって。

千鶴 ……。

民子 チズ、どういうこと？

千鶴 ……。

民子 大学に行っていないんでしょ？

千鶴 ……。

民子 どうしてウソつくの！？

千鶴 ついてないよ…

民子 それじゃ、あの電話はなに？

千鶴 ……。

民子 答えなさい！

千鶴 ……。

民子 千鶴！

山下 民子さん。

民子 | 千鶴、何か悩みごとあるじゃない？ 進路で迷ってるじゃない？ 友

だちと上手くいってないんじゃない？

千鶴 ……。

民子 話していいんだよ。困ったことあったら話して。私を淳子ちゃんだとー。

千鶴 ……じゃない…

民子 なに？

千鶴 お母さんじゃない…

民子 |。

千鶴 お母さんじゃないよ！ | お母さんが辛い時にお見舞いも来ないくせに、
来たら来たでお母さんぶって！ いい加減にしてよ！ お母さんなんかじゃ
ない！ お母さん|

民子が思わず千鶴の顔を平手打ちする。

民子 何も知らないくせに勝手なこと言わないで！ あんたはどうなのよ！
淳子ちゃんが死んだのに、涙一つ流さないで！ 淳子ちゃんが可哀そうよ！

静寂。

千鶴が部屋から駆けだす。

淳子 千鶴！

淳子とわたせは千鶴を追って出ていく。

民子 | 千鶴！

民子は追おうとするが、立ち止まる。

山下 民子さん？

民子 どうしよう…

山下 ?

民子 私…千鶴にひどいこと言った…

山下 大丈夫。

民子 淳子ちゃんと約束したのに…

山下 大丈夫だよ。

民子 (行こうとして) 千鶴！ 千鶴！

山下 (民子の手を掴み) 僕が行くから、民子さんはここで待っていてあげて。民子 でもー

山下 誰かが彼女を待っていてあげないとー家に明かりを灯していないと、二度と戻って来られなくなる。それができるのは民子さんだけなんだよ。

民子 | (こくりと頷く)

山下 行ってきます。

民子 | (頭を下げ) お願いします。

山下 大丈夫。

山下は千鶴の後を追って出ていく。

民子は携帯を取り出し、千鶴に電話をかける。

呼び出し音が聞こえる。

留守番電話につながる。

民子 チズー

留守番電話のアナウンスだと分かり、民子は携帯を切る。

もう一度かけるが、呼び出し音と留守番電話が聞こえる。

民子 千鶴：

もう一度かける。

民子 千鶴：淳子ちゃん：こんな時淳子ちゃんなら：

【過去】

淳子が民子に電話をかけている。

民子が電話に出る。

淳子 民子。

民子 淳子ちゃん♪

淳子 こんな時間にごめんね。

民子 いいよ、朝だから。ーそっちは夜中ー二時ぐらい？ どうしたの？

淳子 元気？

民子 うん。

淳子 ……。

民子 ……。どうしたの？

淳子 ううん。

民子 あ、チズおめでどう。合格したって、手紙来たよ。ー大学生活、楽しんでるらしいじゃない。ー夏休み中？

淳子 ええ。
 民子 遊び歩いているんじゃないの？ だいぶ肩の荷降りたんじゃない？ 大学の休み長いんだから、遊びおいでよ。冬とかおすすめ。案内してあげる。
 淳子 忙しいんじゃないの？
 民子 まあね、来年の春までかかるプロジェクトかかえてんのよ。
 淳子 そう。
 民子 でも、孝太君にエスコートさせるから大丈夫。
 淳子 孝太君？
 民子 彼氏。
 淳子 そう。
 民子 年下なんだけど、可愛くて♪
 淳子 良かったわね。
 民子 淳子ちゃん、チズもいい大人になったんだし、そろそろ自分のことも大
 事にしたら？
 淳子 ……。
 民子 ね。
 淳子 民子。
 民子 ん？
 淳子 お願いがあるの？
 民子 なに？
 淳子 千鶴が卒業するまで、支えてあげてくれないかしら？ お願い。
 民子 え？ なになに？
 淳子 千鶴—お人よしで抜けてて、それでいて頑固で、ちよつと難しいところあるけど：民子しかお願いできる人いないの。
 民子 ちよつと待ってよ—どうしたの、淳子ちゃん。—転勤？ 海外に？
 淳子 ……。
 民子 淳子ちゃん？
 淳子 癌なんですって。
 民子 —え？
 淳子 そうなんですって。
 民子 手術はいつ？
 淳子 転移していて、もう—
 民子 冗談でしょ？
 淳子 ……。
 民子 淳子ちゃん！
 淳子 お願いしていい？
 民子 入院するの？
 淳子 来週から。
 民子 チズには？
 淳子 まだ言っていない。

民子 私も――

淳子 民子、大事な仕事あるんでしょ。

民子 淳子ちゃんの方が大事だよ！

淳子 何のために行ったの？ 十五年になる？ そっちにいつて。あの時、父

さんと母さんの反対押し切って、がんばるって言って行ったんでしょ。やり
遂げなさい。

民子 ……。――ずるいよ…。

淳子 え？

民子 私が淳子ちゃんの言うことなら聞くって知っていて言ってるんでしょ。

淳子 (笑う)――千鶴お願いできる？

民子 こっちのお願い聞いてくれたら、いいよ。

淳子 お願い？

民子 私が行くまで――がんばって。

淳子 ……。

民子 できるだけ、早く終わらせるから。少しでも早く終わらせるから。――が
んばって。

淳子 ありがとう。

民子 もし、約束破ったら、――ド派手なパーティドレス着て葬儀とかに出るか
らね！

淳子 (笑う)

民子 本気なんだから！

淳子 民子。

民子 なに？

淳子 ありがとう。――がんばってみる。

民子 がんばるの。

淳子 そうね。

電話が切れる音。

淳子も消える。

【現在】

民子が携帯を持って佇んでいる。

民子 淳子ちゃん…千鶴…

民子の携帯が鳴る。

山下が舞台上に現れる。

民子 千鶴！？

山下 ごめん、ぼく。

民子 孝太君。

山下 戻ってきた？

民子 まだ。―見つからない？

山下 ―ごめん。

民子 ううん、ありがとう。―疲れたんじゃない？

山下 大丈夫。民子さん、少しは寝た？

民子 寝てられないよ。

山下 ―大丈夫？

民子 大丈夫。

山下 行きそうな所、心当たりない？

民子 ・・・分らない・・・。見ているつもりで見てなかった・・・。

山下 民子さん。

民子 ―うん。

山下 弟さんのところは？

民子 夏樹？

山下 うん。

民子 でもあの子家は知らない―（自問自答するように）ラジオ局。ラジオ局なら

山下 民子さん？

民子 ラジオ局になら行くかも：

山下 ラジオ局？

民子 もう、番組始まるから：終わる時間に電話してみる。

山下 分かった。―僕も行ってみる。

民子 ありがとう。

山下 朝ごはん、三人で食べよう。

民子 うん。

山下は消える。

民子は携帯を握りしめ、台所の方へ移動し、イスに腰掛ける。

【FMモリオカ】

声が聞こえる。

千鶴 あのさ、お金貸してもらえる？

夏樹 え？

千鶴 ううん！ 何でもない。

夏樹 いや、別にいいけど―

千鶴 大丈夫！ 何でもないから！ ごめんね！

千鶴が走って舞台上に出てきて、走り抜けていく。
その後を追って、夏樹が来る。

夏樹 千鶴！ …。

夏樹がソファア―に腰掛ける。
夏樹がソファア―から立ちあがる。

【瀬田家・FMモリオカ】

民子が夏樹に電話をする。

夏樹の携帯が鳴る。

夏樹が携帯をとる。

夏樹 あ、姉貴。ちょうどよかつー。

民子 千鶴行ってない？

夏樹 ーえ？

民子 千鶴そっちに行行ってない？

夏樹 ああ、ついさっきまでここに。

民子 やっぱり…

夏樹 なに？

民子 千鶴、昨日家を飛び出したつきり帰ってきてないの。

夏樹 家を出たって…どういうことだよ！ しっかり見てろよ！

わりに千鶴を支えるって約束だったろ！

姉さんの代

民子 ごめんなさい。

夏樹 ーいい、探してくる。まだ遠くには行ってないはずだ。

民子 ーごめんなさい。

夏樹 姉貴は家に来てくれ。

夏樹が携帯を切り、駆けだそうとする。

そこに、日山が飛び込んでくる。

日山 (息を切らせて駆けこんでくる) 夏樹さん！

夏樹 (日山の方を向き) なに！？ 俺ー

日山 文ちゃんが屋上に！

夏樹 え？

聡介が急いで日山が来た方向へ走り出す。

日山 カギをかけられてー

夏樹 ー守衛さんに！

日山 はい！

日山と夏樹が守衛室へと走る。

民子は山下に電話をする。

民子 孝太君、千鶴やっぱラジオ局に来てた。—ついさっきまでいたって。
—お願い。

民子は電話を切る。

【岩手公園のベンチ】

千鶴がベンチに腰掛けている。
そこに山下が歩いてくる。手にはコンビニの袋。

山下 おはようございます。

千鶴 —！

千鶴はベンチから立ちあがり、逃げようとする。

山下 逃げるんですか？

千鶴 (立ち止まる)

山下 そうやって、逃げ続けるんですか？

千鶴 —逃げていません。

山下 そうですか。それなら、少しお話しませんか？ (ベンチに座る)

千鶴 —はい。(ベンチに座る)

山下

千鶴

山下 いい天気ですね。

千鶴

山下 ほっぺ、痛くないですか？

千鶴 —はい。

山下 (思い出して笑う) びっくりしましたね。ああいうことする人とは思わ
なかつたなあ。—特別なんですね、千鶴さんのこと。

千鶴 特別？

山下 そう思いますよ。—怒っていますか？

千鶴 怒ってるわけじゃ…。

山下 そういう約束だったようです。

千鶴 約束？

山下 お母さんと。

千鶴 ？

山下 民子さん、大きなプロジェクトのリーダーで。カナダの国立美術館の改
装工事のデザインを手がけていたんです。—飲みます？ 冷たくなっちゃつ
たけど。

千鶴 いえ、結構です。

山下 ホントは人に譲って帰ってこようとしたんですよ。―でも反対されたよ
うで。

千鶴 ?

山下 お姉さんに。―千鶴さんのお母さん。

千鶴 え?

山下 厳しい人だったようですね。一度決めたことはやり遂げるまでがんばれ
って言われて―ホントはもう少しかかる予定だったんだろうけど、一カ月以
上早く終わらせて：間に合いませんでしたけど。

千鶴 ……。

山下 話し聞くだけでもステキな人だったんだろうなああって思うんです、千鶴
さんのお母さん。―ずっと民子さんから聞かされていましたから。―僕は両
親とも元気で、正直分らないところもあるし、まして、男だから、その、
何て言うかな、女の子と母親の関係や姉妹の関係ってピンとこないけど、友
だちとも違う、仲間って言うのかな：そういう関係って羨ましいと思うんで
すけどね。―きつと同じ気持ちだと思いますよ。

千鶴 同じ？

山下 千鶴さんと民子さん。―大切な人を失った悲しみ―

千鶴 (立ちあがり、駆けですが、急に立ち止まり、山下に礼をする)

千鶴は走る。

千鶴 何が私の背中を押したのかは分からない。けれど、行かなきゃ、おばち
やんのところへ行かなくちゃ：そう思って走った。運動音痴で、誰に似たの
かしらっってお母さんに言われ続けた私が走った。何を言うか決まってもいな
いし、何か言わなくちゃならいかも分からない：謝る？ 私が？ 何で？
謝るのはおばちゃんの方だ！ そんなわけのわからないやり取りがぐるぐる
と頭の中で何度も何度も駆け廻る。―お母さんの病気のことを知ってから初
めてお母さんのことが頭の中から消えた：(家につく) ただいま！

民子が出てくる。

淳子とわたせが立っている。

民子 千鶴：

千鶴 (息を切らせながら、民子の頬を引っばる)

民子 ちよっ―

千鶴 女は？

民子 え？

千鶴 女は？

民子 なに？

千鶴 笑顔。

民子 え？

千鶴 これ、お母さんにずっとしてもらってた。

民子 淳子ちゃんに？

千鶴 女は？

民子 | 笑顔？

千鶴 (離して) よろしい。| ああ、疲れた！ (座りこむ)

民子 チズ：ごめんね……。あのね|

千鶴 いいの。何も知らないで勝手なことを言っごめん。

民子 ……

千鶴 ……おばちゃん。

民子 ん？

千鶴 泣いていいよ。

民子 なに？

千鶴 泣いていいよ。私は泣かないけど。

民子 何それ？

千鶴 私は、お母さんがいなくなってから決めたの。人前で泣かないって。笑

顔でいようって。お母さんが笑顔が一番って言ってたから。だって、一度決

めたらやり遂げるのが| 淳子流でしょ。

民子 チズ：

千鶴 だから泣かない。| あれ：そう決めたのに：止まらない：涙が止まらな

いよ：

民子 (優しく千鶴を抱きしめる)

千鶴 泣いてないからね：

民子 うん：分かってる：

千鶴 ……会いたい：

民子 ……

千鶴 お母さんに会いたい：

民子 私も淳子ちゃんに会いたい：

淳子がそんな千鶴と民子の頭を優しく撫でる。

わたせは淳子を見つめている。

暗闇が四人を優しく包む。

【狭間】

淳子とわたせが立っている。

わたせ 昨日から今日といろいろありましたね。千鶴さんが家出したり、火葬
場で出会った男性の恋人が身投げをしそうになったり、千鶴さんが無事に家
にもどってきたり：亡くなってもやることは無くなりませんね。| あれ？
今のシヤレじゃないですよ？

淳子 ……。

わたせ （頭をかき、礼をする）三十四日目が過ぎようとしています。さあ、どの音をいただけるのですか？　なんて、堅苦しい言葉はやめたいのですが、これもきまりでして。だいぶ音も少なくなってきましたから、すこしくらい延長は――

淳子 「な」

わたせ 「な」ですか？　いいんですか？

淳子 ？

わたせ だって、ほら、（自分のほほをつまんで）「女は」に使う音ですよ。今

までだつてずっと千鶴さんに――

淳子 だいおおう（大丈夫）

わたせ 大丈夫ですか？

淳子 （頷く）――だいおおう。

わたせ では、「な」を

淳子 あ！

わたせ え？

淳子 （ちよつと待ってのポーズ）

わたせ あ、待ちますよ。

淳子 おなあえは？（お名前は？）

わたせ 名前ですか？

淳子 はい。

わたせ 私のですか？

淳子 はい。

わたせ いいですよ。

淳子 （首を振る）

わたせ ・・・わたせです。

淳子 はたえあん（わたせさん）

わたせ はい。わたせです。

淳子 （覚えるように）はたえ――はたえ。

わたせ その為に？

淳子 （頷き）「な」

わたせ 不思議な人です。

淳子 ？

わたせ 火葬場であなたと同じ立場の人に声をかける人を初めてみました。

淳子 （ジェスチャーで）「あら？ごめんなさい。」

わたせ いいんです。私も貴重な体験ができました。

淳子 （ジェスチャーで）「どんな？」

わたせ こちらの話ですから。――では、「な」をいただきます。

わたせは目を閉じる。

淳子の「な」が彼方へ消えていく。

わたせは目を開ける。

わたせ 「な」をいただきました。
 淳子 あ(な)：あ(な)：あつき(夏樹)——(ジェスチャーで)「ホントになくなった」

わたせ 本当にいいんですか？

淳子 おう、だいおおう。(もう大丈夫)

わたせ もう大丈夫？ですか：

淳子 はい。

わたせ 淳子さんはそれきり、その日は黙ってしまった。私にはあの日に彼女たちの中で何が変わったのかはわからない。しかし、少しだが、千鶴さんと民子さんの距離が近くなっているような気がした。——そして、「な」を失った淳子さんが千鶴さんにおまじないをすることはなくなった。

【瀬田家】

千鶴が大学に行く格好をしている。

淳子は二人の様子を見ている。

民子が出てくる。

民子 忘れ物ない？

千鶴 ない。

民子 ——。

千鶴 コースの希望用紙、出してくるから。

民子 そ。

千鶴 ——うん。

民子 ——今日は早いんでしょうね。

千鶴 うん。

民子 行つてらっしゃい。

千鶴 行つてきます。

千鶴が出ていく。

民子も部屋に入る。

淳子は出かけて行った千鶴の背中を笑顔で見ている。

【狭間】

わたせ おまじないの言葉を失った日から十日が経った。あの日から淳子さんは千鶴さんに話しかけるのをやめた。優しく千鶴さんを見守り続ける。——四

淳子 「お」

わたせ では、「お」をいただきます。
 淳子 (頷く)

違う空間に聡介とワタセが出てくる。

ワタセ 四十六日目が過ぎようとしています。どの音をいただけますか？

聡介 …「か」。

ワタセ では、「か」をいただきます。―「か」をいただきました。

聡介 あやあ(あやか) …あやあ(あやか)

ワタセ もう、その音は出ません。

聡介 ……。

ワタセ ―分かりきったことを言ってしまいました。すみません。

聡介 (優しく首を振る)

ワタセ 彼の大切な人が身を投げようとしたその日を境に、彼は変わった。嘆くことがなくなつた。彼の大切な人が泣いていても、彼は優しく優しく呼びかける。「文香」と。彼は彼女の半歩前をいつも歩く。足りない音で二人の思ひ出を語りかけながら。彼女が悲しみで足が止まっても、傍らには行かない。半歩前で優しく彼女が立ちあがるのを待ち続けた…。

【瀬田家玄関】

千鶴が出てくる。

千鶴 ―行ってきます。

民子 (声) ……。

千鶴が出かけていく。

淳子と民子はその背中を見守る。

民子は部屋に入っていく。

淳子はその背中を見続けている。

わたせはそれを見ている。

わたせ 淳子さんは千鶴さんの背中を見守る。千鶴さんの歩みをずっとずっとずっと見守り続ける。千鶴さんが、淳子さんのことを思い、歩みを止めてしまっても、千鶴さんの背中を見守り続ける。淳子さんは信じているのだ。千鶴さんが一人で立ちあがれると。―ただ一つ、おまじないの代わりに淳子さんがし始めたことがあった。―それは、眠りについた千鶴さんの頭を数回撫でることだった…。―人は亡くなると旅をするという。四十九日かけて、旅をするという。一日一音ずつ失いながら、ゆっくりと死を受け入れながら…。死は終わりなのだろうか…。私はそうは思わない…。想いが繋がるのなら…。想いを繋げられるのなら…。

わたせは淳子をゆっくりと見据える。
淳子もわたせを静かに見つめている。

わたせ ― 四十七日目が過ぎようとしています。どの音をいただけますか？
淳子 ― 「っ」。

わたせ わかりました。それでは、「っ」をいただきます。― 「っ」をいただきます
ました。そろそろ四十九日になろうとしていますね。

淳子 (頷く)

わたせ どなたにお会いになりますか― っ 決めていきますね。

淳子 (微笑む)

わたせ すみません、これも決まりの質問です。

淳子 (わたせが静かに視線を外す)

わたせ 淳子さんの旅が終わろうとしていた…。

淳子とわたせを暗闇が包む。

【瀬田家】

民子が居間でラジオを聞いている。

民子 チズ〜！ チズ〜！

千鶴 なくに？

民子 早く早く！

千鶴 (出てくる) なに？

民子 聞いて！

千鶴 ん？ ラジオ？

民子 いいから！

フレッシュモーニングが聞こえてくる。

ラジオブースには文香がいる。

聡介はもういない。

文香 私は最愛の人を事故で亡くしました。その現実を受け止められず、寝ているのか起きているのかも分からない日が続きました。―でも、私を支えてくれる友だちや仲間のおかげで、少しずつだけ…ほんの少しでも前を向けるようになった気がしています。でも、本当はパーソナリティとしてやっ
ていける自信がなくなっていました。だって、今日一日をがんばりぬく皆さ
んにエールをおくることができなくなっていたから。・・・。今日は彼
を失って四十九日目でした。―初めて、彼が私の夢に出てきてくれたんです。

別の空間に聡介が現れる。

文香 彼は私の頭を、彼の大きな手で優しく、深く撫でてくれました。そして彼は――

聡介 アアー アアー アアア！（フレーフレー文香） アアー アアー アアア！（フレーフレー文香）

文香 私を応援してくれました。

聡介 アアー アアー アアア！（フレーフレー文香）

文香 何度も何度も……

聡介 アアー アアー アアア！（フレーフレー文香）

文香 彼は私に微笑みかけ、手を振ると、そのまま光の中に消えていきました。

あまりの眩しさに目を閉じ、再び目を開けると今朝でした。――私事の話をしてすみません。まして、こんな現実離れたことを、ここで話す方がいいことだとは思っていません。でも、私は彼に励まされました。ここにはいない、彼に励まされました。――私が彼にしてあげられることはありません。私ができることは、一つだけ、それは毎朝皆さんを元気づけられるよう声を届け続けることだけ――私と同じように最愛の人を失ってしまった人や、自分の夢を失いかけてしまっている人、自分の力で立ちあがるのが難しい人、日々がんばって生きている人へ「がんばって」と声をおくることだけ――大きく息を吸い）フレーフレーあなた！ フレーフレーあなた！ フレー！ フレー！ あなた！――今日一日、がんばりましょう。藤原文香でした。

夏樹がやってくる。

夏樹 お疲れ。

文香 すみませんでした。

夏樹 何が？

文香 だって……

夏樹 俺はいいと思うよ。

文香 ありがとうございます。

日山 文ちゃん！（やってくる）ごめん！ 俺、さっぱり気づかなくて。――辞めようとしていたなんて！

文香 ううん。私が勝手に考えていただけだから。

日山 でも、よかった！ 俺も、応援するから。文ちゃんのこと、応援するから！

文香 ありがとう。

日山 今日、飲みませんか？

文香 え？

夏樹 おい。

日山 文ちゃんが、もう一度がんばると思ったことを祝して！

文香 ごめんなさい、今日は里佳子と飲むんで。

日山 そっか…。

文香 ー行ってきました。

日山 え？ どこに？

文香 聡介の四十九日に。呼んでもらっているんです。

文香が駆けていく。

夏樹 日山ちゃん、君は棘の道を歩む気だね。

日山 棘？ 何すかそれ？ ー文ちゃん、送ってくよ！

日山は文香のことを追っていく。

夏樹 分かってねえところがすごいよな。ー四十九日か…（携帯を取りだし、電話をかける）ー瀬田です。ー明日の四十九日のことで成島さんとお話があってー

夏樹は電話をしながら反対側の方向へ去っていく。

【瀬田家】

千鶴と民子がラジオを聞き終えた。

民子 チズ…。淳子ちゃん、来てくれるかもね。

千鶴 来てくれるかな…。

民子 来る。民子さんの勘は外れたことがない！

千鶴 ホント？

民子 ホント。ーチズに会いに来る。

千鶴 ーうん。

民子 それじゃ、私たちはちよっと買い物に行ってくるから。

千鶴 え？

民子 明日、淳子ちゃんの四十九日でしょ。お花とか果物とか。

千鶴 そっか。ー行ってらっしゃい。

民子 ほ…い。

民子が部屋を出ていく。

千鶴 私は今日一日雲の上ののっているみたい、フワフワとした気持ちで過ごした。お母さんは本当に来てくれるのだろうか。来たら、何を話そう。ちつとも考えはまとまらない。夜になっても、目がさえている。まるで、遠足に行く子どもみたいだ…。お母さんに会いたい…お母さんに。気がつく、居間の時計は深夜二時を過ぎていた。桜につぼみができるころでも、この時間帯はさすがに肌寒い。何か羽織るものが欲しいと思った時には、私は眠っ

ていた…。

淳子がカーデイガンを持って現れる。
わたせは淳子を見ていた。
淳子は千鶴にカーデイガンをかける。
千鶴は、ふと目を覚ます。

千鶴 ありがとう…おばちゃん…
淳子 ……。
千鶴 ……お母さん？
淳子 (微笑む)
千鶴 会いに来てくれたの？
淳子 (優しく頷く)
千鶴 本当にお母さん？
淳子 (頷く)
千鶴 お母さん…私…あのね…あのね…

千鶴は涙で声がつまり、言葉が出てこない。

淳子 ちゅ。
千鶴 (名前を呼ばれたのでふと顔をあげる)
淳子 (千鶴の頬をつまむ)
千鶴 ……。
淳子 ちゅ。
千鶴 ……おんなは？
淳子 (頷く)
千鶴 えがお…

淳子は優しく微笑むと、千鶴を優しく抱きしめる。

わたせ 淳子さんは千鶴さんを優しく、深く抱きしめた。二人の時間が永遠に
続くことを願いたくなる…。しかし、別れの時間はすぐそこまで来ていた…。

淳子 ちゅ。
千鶴 (顔をあげる)
淳子 (千鶴の頬をつまむ)
千鶴 ……(頷きながら) 笑顔…。

淳子が立ちあがる。

千鶴 行かないで！

淳子 (困った表情で静かに首を振る。)

千鶴 : ホントはいっぱいいっぱい喋りたいことあったんだけど…お母さん、ありがとう。—いっばいいいっばいい、ありがとう。

淳子 (頷き、行こうとする)

千鶴 お母さん!

淳子 (振り向く)

千鶴 (淳子の頬をつまみ) —女は?

淳子 : チュ。(笑顔になる)

千鶴 笑顔:(手を離し) 私、笑顔でいるから:ずっと笑顔でいるから。—いってらっしゃい。

淳子 (頷く)

淳子が光の中に消えていく。

わたせも消えている。

千鶴はあまりの眩しさに目を閉じる。

千鶴が再び目を開けると、朝になっていた。

千鶴 ……。(頬をつまみ、優しい微笑みをうがべ) 笑顔…。

民子が出てくる。喪服姿である。

民子 こんなところで寝ていて、お墓に行く—ってどうした?

千鶴 (民子を見る)

民子 —そっか。よかったね。

千鶴 うん。

民子 あとで話し聞かせて。

千鶴 うん。

民子 さあ、早く着かえて! お墓を拜んでから、お寺の本堂の用意するんだから。

千鶴 おばちゃん、午前中で全部終わるんですよ。

民子 うん?

千鶴 終わったら、お花見に行こう。

民子 桜? 咲いてる?

千鶴 まだ蕾だろうけど、行きたい。—お母さんと見る約束していた桜なんだ。

民子 —そう。いいわよって授業は? あんたが、午後は授業があるからって午前中にしたんだよ。

千鶴 咲に代返頼む。

民子 —仕方ないわね。

山下 (声) 民子さん、僕のネクタイ知らない?

民子 今行く! 早く着替えなさい。(部屋を出ていく)

千鶴 うん。―お母さん、櫻、見てくる。

千鶴が部屋へと駆けていく。

【狭間】

わたせと淳子が出てくる。

わたせ ここが来世への扉です。

淳子 (頷く)

わたせ ここでは、音が戻っていますよ。

淳子 え？ あら、ホント。

わたせ 四十九日間の旅が終わりましたから。

淳子 あいうえお、かきくけこ、さしすせそ。話せるっていいわね。

わたせ (微笑む)―すみませんでした。

淳子 ？

わたせ あの時、追伸なんて私が言ったばかりに、かえって苦しませてしまったら―

淳子 (頬をつまむ)

わたせ (少し驚く)

淳子 笑顔。

わたせ 淳子さん：

淳子 (手を離す) そんなことはありませんよ。あなたのあの言葉が、私を支えていました。どんな言葉を―いえ、どんな想いを千鶴に伝えるか、それだけを考えていた気がします。

わたせ ……。

淳子 笑顔。

わたせ ―はい。

淳子 わたせさん。ありがとう。

わたせ 淳子さん：

淳子 行ってきます。

わたせ ―行ってらっしゃい。

淳子が来世の扉に消えていく。

わたせが残る。

ワタセが現れる。

ワタセ 行ってしまいましたか。

わたせ はい。―彼は？

ワタセ 想いを伝えられたようです。

わたせ そうですか。

ワタセ ……。

わたせ・・・。

ワタセ 彼が来世の扉を開ける時、感謝されました。

わたせ そうですか。

ワタセ 追伸ですか…。

わたせ はい。生きている人へ想いを伝えられるなら、それが、生きている人の背中を押せるなら、素敵なことだと思えます。想いは繋がるのですから…。
ワタセ そうかもしれません。

扉が開く音。

わたせとワタセはゆっくりと扉が開いた方を見る。

わたせ・ワタセ いろはにほへと ちりぬるを わかよたれそ つねならむ
うみのおくやま けふこえて あさきゆめみし ゑひもせす。さあ、どの音
をいただけますか？

光がわたせとワタセを包む。

【終】

初演上演記録

《上演日時》

2012.3.3 (土) 14:00～／19:00～
2012.3.4 (日) 14:00～

《会場》

いわてアートサポートセンター風のスタジオ

《キャスト》

瀬田淳子・・・高野ひとみ（劇団・風紀委員会）
吉岡聡介・・・與羽利貴（岩手大学劇団かっぱ）
わたせ・・・池田幸代
ワタセ・・・阿部菜摘
藤原文香・・・高橋斐子
瀬田千鶴・・・山田真由香（岩手大学劇団かっぱ）
瀬田民子・・・芦澤志帆子（劇団ゼミナール）
山下孝太・・・木村勇太（フリー）
中村里佳子・・・小笠原尚子
日山貴明・・・及川貴樹
武田咲・・・上野香織
成島・・・高崎美絵
瀬田夏樹・・・遠藤雄史

《スタッフ》

【舞台監督】 及川貴樹
【舞台美術】 池田幸代
【舞台装置】 及川貴樹
池田幸代
池田幸代 與羽利貴（岩手大学劇団かっぱ）
阿部菜摘 高橋斐子（劇団ゼミナール）
阿部菜摘 高橋斐子 木村勇太（フリー）
菊池瑛子（劇団コトナコナタ）
遠藤雄史 富田なつみ（フリー）
高崎美絵 上野香織
山田真由香（岩手大学劇団かっぱ）
熊谷航（岩手大学劇団かっぱ）
【制作】 熊谷航 熊谷航（岩手大学劇団かっぱ）
布田智章 熊谷航（岩手大学劇団かっぱ）
高野ひとみ（劇団・風紀委員会）
【WEB】 小笠原尚子

本作品の著作権は、作者である遠藤雄史に帰属します。
上演許可などのお問い合わせは、作者の所属する劇団トラブルカフェシアター
まで。上演する際は有料無料に関わらず、必ずご連絡ください。

劇団トラブルカフェシアター HP <http://tctmorioka.web.fc2.com/>
Mail tct_morioka@yahoo.co.jp